

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

7



第七十七卷 第七号 日本幼稚園協会

幼児の体づくり役に役立つ カリキュラム作成の参考書

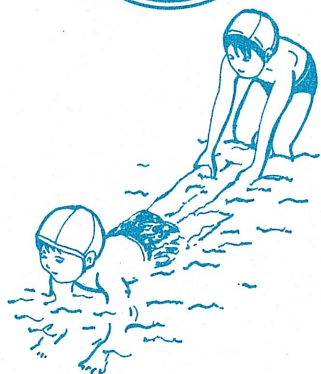
保育実技シリーズ ⑬

7月
発売!

幼児の体育あそび 4

プール・太鼓橋・雲梯編
三宅照子・桑原芳子共著

B5判・110頁 定価1,000円



〈プール〉では、初めは水に慣れるために、簡単な水あそびから入ります。そして次第に水に体を沈めたり、顔にかぶつたりの段階をふまえながら、水に親しませ、最終的には少しでも泳げるようになることを目指します。
〈太鼓橋・雲梯〉では、高いところへのぼる、ぶらさがる、とびおる等の身体活動を、段階的に指導できるように解説されています。管理面の注意事項も同時に紹介されています。

既 刊

幼児の体育あそび 1

マット・ボール編

三宅照子著

B5判 120頁 1,000円 千160円

幼児の体育あそび 2

なわ・平均台・とび箱編

三宅照子著

B5判 128頁 1,000円 千160円

幼児の体育あそび 3

鉄棒・フープ・トランポリン編

三宅照子・桑原芳子共著

B5判 112頁 1,000円 千160円

®

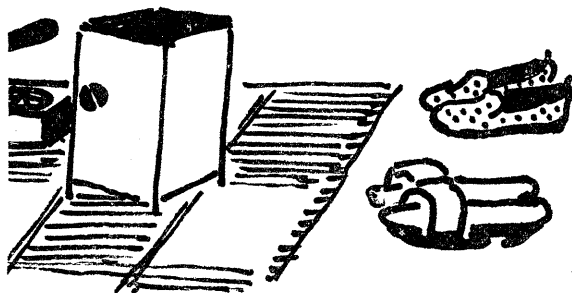
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 TEL (03) 292-7781代にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十七卷 第七号





目次

幼児の教育 目次

——第七十七卷 七月号——

表紙 梶山俊夫
カッタ 中島英子

ライフプランニングとしての幼児教育……………牛島 義友……………(4)

人でつづる保育史

高崎能樹先生の生涯とその教育活動(その一)……………小林 公一……………(6)

幼児たちから学ぶかざるかざること③……………丸山 ふみ……………(12)

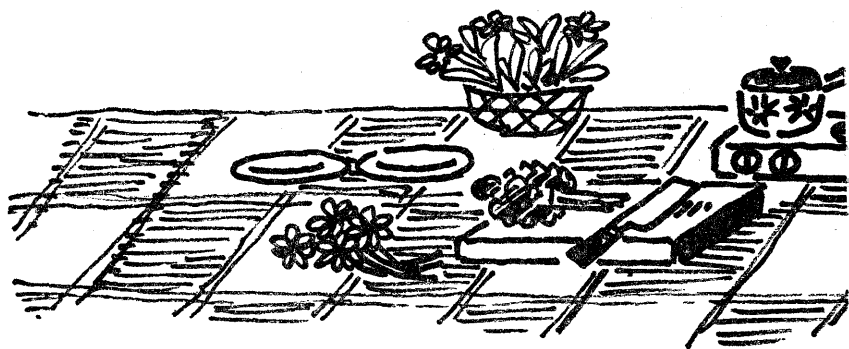
海……………豊永富佐子……………(14)

帆……………矢島 昂……………(16)

海の夢……………秋山 達子……………(18)

© 1978

日本幼稚園協会



子どもと共なる日々

こどもたびごっこについて

柘田 正子 (20)

私の保育日誌

太田 留美 (24)

子どもの活動と保育空間(その二)

堀井 仁子 (25)

大人になってゆく子ども

磯貝 保子 (32)

海に想う

山杓 雅信 (38)

無人島にいだんだ子どもたち

宮内 正民 (40)

はるかな海

飯沼 佳子 (42)

★海外文献紹介

(44)

経験

—— 悲しい経験 その二 ——

村田 修子 (48)

ニューヨークの中の日本人(その三)

—— 子どもの世界 ——

佐藤奈美子 (51)

保育の体験と思索

—— 子どもの世界の探究 —— (十七)

津守 真 (58)

ライフプランニングとしての

幼児教育



牛島 義友

年をとったら悠々自適の生活に入れるかと思うと中々そうはいかない。特に日本人はよく働かされているようである。就業率を見ると、六十五歳—六十九歳の男の五十二・四%、七十歳—七十四歳までの男の三十四・六%は仕事をしている。この率は欧米の人より倍以上高い率である。

私も大学を出てから五十年間働き続けたわけであり、こんなにもいつまでも働くのならば、何も急いで早く働き始める必要もなからう。労働開始時期までに十分の期間をとる、豊かな生活経験をなし、個性を十分生かした悔いる

ことのない幼少年期を送ることが必要ではなからうか。人より少しでも早く学校に入り、かけ足で卒業することが、どれだけの意味があるうか。学齢前の幼児期にすら教育だ、勉強だと騒ぎ立て、零歳児からの教育などと言うのは、育児ノイローゼの徴候かもしれない。もっとも各時期においてできるだけ豊かな生活経験を持たせるといふのは正しいことであるが、よい学校への入学を目ざしての無駄のない計画的指導を行なえというのなら、それは今日の受験勉強一辺倒のゆがめられた教育につながるものである。

今日は学校教育においてもゆとりのある教育が要求されているが、幼児教育においてはもっと遊びを中心とした豊かな生活経験が必要である。このような受験教育とか、知育偏重の競争社会にかり立てられるにはマスコミなどによる情報操作も関係がある。たとえば乱塾時代などという言葉を発明して学習塾の繁栄を説き、我が子もここに通わせなければ取り残されてしまうとの不安をかき立てる。

私の周辺を見ていると、ピアノや水泳、野球クラブなどには通わせているが、別に学習塾にはやっていないものも少なくない。今日の子どもの達の生活環境を考えれば、親がこのようなスポーツの場を配慮してやることは、当然のことではあるが、親としては勉強が遅れはしまいかの不安と戦いながらやっているらしい。親もまた大らかな気持で子ども達と一しょに生活を楽しむことができないものであるうか。子どもを育てるということは自信がなく、しかも勇氣と決断を必要とすることである。この親を不安に追いこむのでなく、勇氣付けてやるのが本当の教育指導であるう。

今日の受験勉強的人間形成の欠点は創造的知性と他人の立場にも理解をもつ協力的な態度の欠如であろう。このよな点は幼少年期の自由な遊びの生活、仲のよい友達関係によってもっとも自然に養われる。子どもを自由にのばしたい、子どもの童心を傷つけない、幼き日に生命の尊さと、思いやりの心を教えたい、との親の自然の願いを第一とする教育環境をつくりたい。

次に早く大人にするのでなく、幼き日は幼きままに、すなわち、親とのスキンシップによる愛情の必要な時は豊かに愛にひたり、想像的知性の発達する時にはメルヘンの世界に遊び、社会性にめざめた時は終日友と遊び暮し、知識生活時代に入れば苦心して問題を解いたり、工夫をこらして何かを作り出す発明、発見の喜びを経験させたい。時間は充分かけ、又必要な玩具や教材は充分用意して。

* * *

高崎能樹先生の生涯とその教育活動（その一）

小林 公一

はじめに

高崎能樹先生を存じ上げたのは、令息毅氏を通してでした。高崎毅氏が旧制府立高等学校高等科一年生のとき、私は三年生で、府高YMCA（後に府高聖書研究会と改称）を協力して復興したのがきっかけで知り合い、その後ずっと親しい交りが続きました。毅氏は昭和四八（一九七三）年六月、心筋梗塞で惜しくも急逝されました。五七歳の若さでした。高崎家にはしばしば訪れ、昭和一六年には能樹先生の牧する阿佐谷東教会の

会員となり能樹・あい御夫妻には私どもの結婚式の仲人をお願いするといった間柄だったので。

能樹先生のことを書くようにとの御依頼を受け、鋭意資料を集めました。必ずしも充分でないのですが、解った範囲内で一応まとめようと致します。

一、経歴

高崎能樹先生は明治一七（一八八四）年鹿兒島県に生れ、上京して独協中学に入学します。その頃は硬派の不良で、短刀を

忍ばせてよく喧嘩を吹っかけたそうです。河村君というクリスチャン・ホーム出身の同級生が居り、同氏の妹さんの祈りによって回心してキリスト教信者となったそうです。その後明治学院神学部に進学します。渡辺善太氏（銀座教会名誉牧師）とは独協中学、明治学院を通しての友人です。明治学院神学部を明治四三（一九一〇）年卒業、同年臼杵教会を、大正元（一九一二年）年には佐賀教会を、大正三（一九一四）年には福岡教会を、大正六（一九一七）年には東京の赤坂教会を牧会し、大正一一（一九二二）年一〇月から、旧日本基督教会日曜学校局長事に就任し、大正一四（一九二五）年九月に及びます。

この間、小学校教師の経験もあり、女兒の虱をとってあげたという逸話も残っています。新聞社に勤務したこともありま

す。姉の家に住んだこともあり、植村正久牧師宅に同居したこともあります。植村牧師が富士見町教会を牧していた関係もあり、高崎先生は同教会の日曜学校小学科低学年の教師を勤め、同日曜学校の幼稚科の教師であったアルウィン・ペラ氏と教育論で論争したこともあるそうです。

大正一〇（一九二二）年九月より青山学院神学部講師並に教授として、児童心理、宗教教育等の講座を担当し、昭和七（一九三二）年三月までに及びます。大正一三（一九二四）年一月

より日本基督教会児童館長（上野マリア館館長）に就任し、関東大震災（大正一二・九・一）で罹災した幼少年の救護に努め、バラック児童の宗教教育と天幕伝道に従事します。大正一四（一九二五）年三月、バラックは撤退され、マリア館閉鎖とともに任務を終了し、児童館長を辞任、中野区東中野に日本基督東中野伝道所を設置し、教育的伝道を開始します。大正一四（一九二五）年七月、杉並区阿佐谷小山六七に移住し、同年一〇月、阿佐谷幼稚園を阿佐谷五丁目三〇番地に設立して開園、園長となり幼児教育に努めると同時に日曜学校を開始します。

昭和二（一九二七）年三月、大人の礼拝集会を開始します。

昭和三（一九二八）年、『子供の教養』誌（月刊）を発刊します。これは昭和一六（一九四一）年末まで続きますが、戦争のため暫く休刊となり、戦後昭和二一（一九四六）年三月再刊され、昭和二八（一九五三）年まで続きます。

昭和四（一九二九）年一月、日本基督阿佐谷伝道教会建設式が挙行され、昭和九（一九三四）年六月、日本基督阿佐谷教会に牧師として招聘され、同七月独立教会となります。昭和一〇（一九三五）年一〇月、阿佐谷幼稚園園舎（現在の）が落成、昭和一一（一九三六）年一〇月、阿佐谷母の学校を設立し、母性の再教育に努めました。昭和二一（一九四六）年四月、阿佐

谷東教会牧師を辞任、名譽牧師として昭和三三（一九五八）年二月まで奉仕。昭和二八（一九五三）年十一月、阿佐谷幼稚園舎及び同敷地四八〇・五五坪を日本基督教団阿佐谷東教会に寄贈。昭和三三（一九五八）年二月、狭心症にて逝去。昭和三四（一九五九）年十一月、高崎能樹宅地跡に阿佐谷東教会会堂を建設、献堂式が挙行されました。

二、教育活動

右に記しました経歴で明らか通り、高崎能樹先生は神学校を卒業後、牧師として大人の牧会活動にも従事されましたが、その主精力を子どものために注ぎます。日曜学校局の主事として子どものための教育的伝道に尽しますが、これは、上野マリア館館長に就任したことによって一層強められました。またそれが、日曜学校の延長として、幼稚園に力を注ぐことになりました。阿佐谷幼稚園を開園して自ら園長となり、基督教保育連盟への指導的役割を果たしたこともその現れです。後にも触れますが、先生の保育理論は、心理学がその一つの基礎となっています。義兄の心理学者上野陽一氏の影響も考えられます。講演に、執筆活動に、教育に、八面六臂の活躍を先生はされました。

が、そのモットーは、子どもの純潔と家庭の聖化という点にありました。「家庭の祭壇化」ということを絶えず強調しました。先生は多くの著作も残されましたが、以下、入手できた著作の主なものを年代順に跡づけてみることにしましょう。

『基督をめあてに』（一九二〇年、警醒社）は、「福面新報」の少年少女欄に掲載したものを増補、訂正したもので、これには、教話が二五、お伽話が五つ収められています。教話の中には、「豚飼の豆莢^が」という題で、聖書に出てくる「放蕩息子」の譬話が扱われています。また、「お人形」という題で、旧約聖書創世記一章二七節に記されている「神の像」の問題が扱われています。「福は内鬼は外」という題の教話は、人が酒に呑まれないように、克己や忍耐の必要を説いています。「附録」の中に、「生命の水」という題の話が載っていますが、これは、天国についての話です。

『信仰の友』臨時増刊号（一九二〇年二月、信仰の友社）という小冊子の中に、高崎花童というペン・ネームで「天国のお蔵」という話を載せています。

『子供に聞かせたいお話』（一九二三年、搖籃社）の中には、童話、寓話、実話、詩、理科の話、伝説、創作が集められています。

『子供の心』（一九二四年、新生堂）は著者が各地各所で見聞した事実を書き集め、子どもを具体的に解明しています。

その中には、飲酒や喫煙の害についても触れています。

『子供の教養』（月刊誌）は、昭和三（一九二八）年に発刊され、昭和一六（一九四一）年末まで続きましたが、戦争のため、雑誌統合令によって『国民保育』に統合されました。その後、『国民保育』誌も廃刊となります。戦後『子供の教養』は復刊され、昭和二一（一九四六）年三月から再発刊され、昭和二八（一九五三）年に及びます。高崎能樹先生を中心に、先生のお宅におかれた子供の教養社から出されました。

「顧問」として、赤井米吉、上野陽一、岡部弥太郎、倉橋惣三、斎藤文雄、田中幸一、田中寛一、西村真琴といった幼児教育関係の各界の錚々たる人々が名を連ね、「同人」には、伊福部敬子、牛島義友、加藤常吉、栗山重、後藤岩男、小見山栄一、鈴木清、山下俊郎、吉田源治郎、広瀬ハマコ、長谷川初音という保育関係の指導者たちが挙げられ、「編輯局員」として、上沢謙二、佐藤瑞彦、中島義四郎、長島貞夫、高崎能樹、高崎毅の名が記されていて、これら保育関係の第一線で活躍している人たちによって誌面が飾られています。

この『子供の教養』誌が最も強調したことは、家庭の祭壇化

と、母性の再教育ということです。

同誌昭和二二（一九四七）年六月号に、「育児十則」が載っています。それは次に記す通りです。

- 1、子供は神の子お国の宝。（この子供観がはつきりせねば本當の教育は出来ません）
- 2、軽く思ふな子供の将来。（子供の五十年の将来を静かに幻に描いて見て下さい）
- 3、知識教育よりも性格教育。（自信をもち楽観的に努力して進む生活態度を躱けることが大切であります）
- 4、強くやさしく聖く育てよ。（自律性と社会性と宗教性を教養することに努めて下さい）
- 5、長所を伸ばして、短所は捨て置け。（長所さへ伸ばせば短所は自然に被はれてしまひます）
- 6、怒るな、叱るな、賞め過ぎるな。（親は自分の感情を抑制して、子供に真実を表はさねばなりません）
- 7、体も心もよく動くやうに。（無精な躱げが子供の能力を停滞させます）
- 8、規則正しい生活指導がかんじん。（家庭生活に規律を設けて徹底して下さい）
- 9、腹八分目に何でも食べる習慣をつけよ。（偏食は大禁物、

大食は不良化の基)

10、子供は風の子光の子。(日光浴と空気浴とを奨励して下さ

る)

これは恐らく高崎能樹先生が書かれたものと思います。

『幼児に聴かせる聖書のお話の取扱ひ方』(一九三五年、基督
教保育聯盟関東部会)

これは、同じ題目で、一九五四年、草美社からも出版されて
います。表現の多少の差異は見られますが、内容は全く同じで
す。

内容は、「旧約聖書のお話」と「イエス様のお話」とから成
り立っています。従って、新約聖書は四福音書(マタイ・マル
コ・ルカ・ヨハネによる福音書)だけが取り扱われており、パ
ウロ書簡その他には全然触れていません。

冒頭、幼児の宗教心は「神秘心」と「感謝心」と「信頼心」
の三つが著しく働くので、この方面の教養に主力を注がねばな
らぬ、と記されています。従って聖書に示されている(1)神の驚
くべき力、(2)神の造り給える万物の不思議、(3)神の守護、(4)神
の愛、などを教材とすることが最も適当で、その教訓の主眼点
をここに結びつけることがよいとされ、更に、この教訓を童話

(風にわかり易く語るがよい、と主張しています。

また、幼児時代の罪の意識は「禁じられた事を犯すことが
罪」というのが主要点であるから、それをよく心得てかからぬ
ばならぬ、とし、それで不義不徳の問題よりも不信仰と神の命
令に従わぬことが誤りであることを説き示すべきである。結局
神様にさえ従っておれば大丈夫であり、安心であることを教訓
の主眼点とする、と説いています。

更に、旧約聖書には、不道德な記事を遠慮なく記載してある
が、幼児に語るときは省いてよい、と指導しています。

イエスの話に関しては、キリストに対し神秘と感謝と信頼と
を向けさせることが大切な要点である、とし、(1)キリストの愛
の働き、(2)キリストの守護、(3)キリストの救助、(4)キリストの
偉い権威、及び「幼児としてのキリスト」を紹介して共感させ
る必要がある、と主張しています。

また、残忍な物語は幼児に禁物であるが、苦心してどの程度
まで語り得るかを多年試みた結果を掲載することにした。危険
を感じられるお方はやめて頂きたい、と述べています。

旧約聖書のお話は、創世記からヨナ書までを選び、人物の行
動を中心に、主題、教訓、要領、注意という順序で、要点を簡
明に記しています。その中から幾つかの気付いた点を述べてみ

ましよう。

「カイン爺さんのお話」の場合、残忍な弟殺しの状況はすらりと簡単に語って、さんげの心を認めるように語ることが大切である、という注意がなされ、兄弟仲よくせよ、という教訓にもってゆくよう取り扱うべきであるとする指導がなされています。

「ノアの爺さんの話」は、神様のお言付のままにすることが目指され、童話風に興味深く語るがよい、という指導がなされています。

「バベルの塔のお話」は、塔が高くなればなる程自分たちの仕事がかえって困窮したが、それに反して、天は更に高く高く仰がれることを童話風に物語るべきである、として、神様には勝てぬ、ことを教えるのが目的とされています。

「イエス様のお話」の中で、「難をのがれてエジプトへ」(マタイによる福音書二ノ一三——二三)の個所で、小児が殺害されたことは省くがよい。ただヘロデ王がイエス様を見つけようとするためと説明してよい、と注釈が付けられています。

「善きサマリヤ人」(ルカによる福音書一〇ノ二五——三七)の話に就いては、劇的に語ると面白いが、強盗の有様は簡単に説明すべきである、という指導が為されています。

「目あきになった乞食」(ヨハネによる福音書九ノ一——四〇)の個所では、目に泥をぬったことは語らぬがよい。これはまねする心配があるからである。他は聖書通り、という指導が為されています。

「賢い乙女と愚かな乙女」(マタイによる福音書二五ノ一——一三)に就いては、婚礼の時の習慣を語り、五人の賢き乙女のごとく油断せぬようにすすめる、と注釈づけられています。

「別れの晩さん」(ルカによる福音書二二ノ一——三四)ここでは、晩さんの様子と弟子たちの上位争いを戒しめ給うたことを語る、とされています。

「十字架と復活」(ヨハネによる福音書一九ノ一七——二〇ノ三〇)の個所では、十字架につけられ給うたことは簡単に語り、復活の喜びを強く語って終る、という指導が為されています。

〓 つづく 〓
(青山学院大学)



幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ③

—水色のノートから—

丸山ふみ

あま蛙と幼児たち

雑草が幼児たちの足元をかくしてしまいう程伸びてくると、

園庭の木蔭に集まってくる幼児たちが増えてきます。

この頃になると、てんとう虫・蝶・かたつむりが幼児の遊び仲間に登場し、その中で男児たちの人気をあつめているのがあま蛙で、そのあま蛙で私は失敗をしてしまいました。

てんとう虫を遊び着の胸に「ブローチみたいやろ」と止らせてみたものの、パッと逃げられ大さわぎをしている女児達のグループには目もくれないで男児達はあま蛙を追っかけてます。

「園長先生もやろか」とポケットの口を一杯開いてみせてくれるユウちゃんの表情は得意満面です。ポケットの中に

は、二、三匹のあま蛙が入っているらしくふくらんでおり、まわりにいるシェンくんや、タケシ君達も同じように掴まえているらしく、いずれも手でしっかり押さえています。

ユウちゃんの言葉に思わずポケットの中へ視線を移したものの、どうも「有難う」とか「どれをいただこうかな」なんて言えません。匂ってもこないのに生臭く思いました。わずかに細い蛙の脚と緑色の胴が重なりあっているのが目に入っただけなのですが。

無言で立ちすくんだ私の姿から幼児たちはそれぞれ何かを感じとったようで「やめた」と走り去ってしまいました。

ほんの一瞬のこのできごとが私にとってはショックで、走り去っていく三名の男児の後姿を目で追いながら「園長先生やろか」と飛びついてこられたのに、蛙の肌ざわりを勝手に想像して避けたことを後悔して、今と反対の行動を心の中へ描いていました。

「ありがとう、どれが一番大きいかな」「あま蛙はね、ほら後脚にしか水かき付いていないのよ」とか言って私の手にもらったとします。そして掌の中へあま蛙をつつみこんでも、

その先がどうしていいかわからず、きつと草の中へ逃がしてしまふことでしょう。あま蛙を掴えても遊ぶという経験が自分に無いことに気付いたのでした。

小学生の時、お玉じゃくしを小川でとり、「足がでた、手がでた」と喜んだ記憶や、幼児とともに生活するなかで、お玉じゃくしから蛙へという飼育の経験はあっても、遊びの仲間にしたことがなかったのです。

幼児たちが身近な動植物に愛情をもち、いたわり、たいせつにすることが必要で、今の幼児たちの生活に自然とのかかわりが失なわれつつあるとあって、このままではいけないのだと三人組を追いかけてきました。

「やつと、低鉄棒のところ、ユウちゃんに追いつき、その前にまわって息をはずませながら、「あのね、その蛙たちポケットの中ではかわいそうなの。草の上へ出してやって」と頼みました。

ところが、「いややもん」「僕らがとったやで、僕らのもんやもん」「先生は関係ない」と口々にするのは抗議の言葉です。その上ポケットを押さえた手には、益々力が入っていき、もう蛙は死んでいるかもわかりません。

私は、すっかり慌ててしまい、「あのね蛙のお母さんが、きつとさがしているわよ」というと、この言葉は見事失敗でした。

「園長先生、この蛙、子どもとちがうの。あのな、皆、同じやよ」

「そう、皆同じなの。そしたら、全部ここへ出して先生に見せてよ」

この頃には、幼児の気持とはつきり対立している自分の感情に、「生命を大切にすること」を教えているのだというべールをかぶせてみたものの、これしか方法がなかったのかという、ためらいが私の表情にでていたと思います。

動かなくなったあま蛙に興味を失いながらも、私の行動に四歳児は立ちすくんだようで、この十分たらずの間できつとで、生きているのだということは、動物の生き方に目を向け、餌を食べ糞をし、卵や子どもを産み、だんだん大きくなる事実があつてこそ、生命を大切にすることがわかるのだと反省したのでした。

(松阪市立松江幼稚園)

海



豊永富佐子

「海が見えた。海が見える。さすがにお芙美さんは、うまいこ

とを言ったものだ。海をながめるよるこびの心が、この五字と五字、たった十字の短いことばの中から、生き生きと、うず潮のように盛りあがってくる。海が見える。海が見えた。これは下関で生まれた作家、いまは亡き林芙美子の『放浪記』の中にある文句だ」最近、私の読んだ新聞にこんな記事がのっていた。

私も若い時に放浪記を読んだが、そんな文句のあったことがよみがえらない。すぐ本を出して一気に読み進んだが、なかなかその文句に出会えなかった。七十頁余り読みふけた時、(八月×日)「海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい」と目にとまった。新聞には、「この海は尾道の海だが、お芙美さんの胸の底の底には、きつと、関門の海が映っていたに

違いない」と続けられていた。

私の勤める幼稚園は、その関門の海を北へ山陰に向う。釣り人がポイントとする岩場や波止場のあるところ。早春とは言っても、まだ季節風の吹き荒れる北浦では、これより以北に、釣り人はなじみ深い、磯場、魚のメッカが点在し、早期からラッキーを求めて釣り人が行く。日本海は春がきても、うねりのような高波が寄せたり、瀬戸内海のようなやさしさが無い。

釣りの話になったのは、こうした荒い海でとれた魚の方がおいしいことを、北浦地方に嫁してから知ったからである。だから私は「海」と言えば活魚を連想する。

動かない海。満潮時の静かな海を見ると、その平らかな海の底にいろいろな魚や海藻、貝類がそれぞれ共存し、自分の生き方をし

ている。不況も無く、交通事故も、進学の苦勞も無い平和が感ぜられる。しかし、海中には海中での生きざま、ルールもあるだろう。釣り人に釣り上げられ、魚が大きい時には成績がよかったと胸を張り、魚が小さい時には釣り人の肩が落ちる。

私はこのことを保育に置きかえてみた。子ども達が自由な活動を楽しんでる。遊びの場を設定し、コーナー、コーナーで遊びが広げられ、子どもの発想で遊びが移行していったりする。その中に教師が立って釣り糸をたれ、ヒントのえさを投げ入れた時、そのえさととびつき、一日のねらいが達成された活動が釣り上げられた時、教師は嬉しく思う。かりにその仕掛けの場作り、配慮、手順など教材研究不足であった時は、糸を通じて感じる感触、手ごたえがなく、小さいものしか釣れずに肩が落ちるだろう。

今一つ「海」と言えば私には、血の気が引く思いの記憶がある。三年前に自閉症児を受け持った。丁度三月であった。二か年の保育によって、母親の付き添いも要らなくなり、園外にとび出すことも無くなっていた或る日、降園前になって姿が見えなくなった。再び園外に出たと直感した。私の足は何故か海の方に向っていた。

浜を見ると、園児服のHが沖に突き出ている波止場の先端に居る。一瞬冷水を浴びた感じがした。「Hちゃん、じっとしていて」

私の声は浜いっぱいに広がった。しかし、呼べば呼ぶ程、突堤の左右へジグザグ。今にも海中に落ちそうになる。つないである漁船に板ばしごがしてあるので渡ろうとする。私の必死の声も自閉症児にはまるで通じない。Hの黄色い帽子がその時海面に落ちて浮いた。Hは浮いている自分の帽子を見つめてやっと止まってくれた。私の手が力いっぱいHの肩をつかんでいた。私の心からしぼる声を海は聞いてくれた。

保育中に時折、風向きによってふっと、潮の香が吹き込んでくる。子ども達は当然のことながら、海、船、浜に関心が深い。美しい貝がら、石などを見つけては見せにくる。海辺の人の気性は歯切れがよい。園児達の父母も、海辺の大自然に育まれた人が多いだろう。なやみがあったら、海辺に立つと治ると地元の人はずう。大海原は人の胸を開き、大きく包み、そして聞いてくれる。寄せては返す波、或る時はさざ波、或る時は大波、そして高波となっている。保育の中にあつてやはり私たちも波を変ええることを考える。それは活動の中にゆきぶりを与えている。

生活の身边に海がある。日本海は海域、漁場など多くの問題をかかえている。すぐ近くでは原発、海岸汚染を論じられ、争われている事も、聞こえているやら、今日も広い、深い海があり、海が見える。

(山口県・室津幼稚園)

帆



矢島 昂

海のことを考えると、古代ギリシャの伶人アリーオーンの物語が思い浮ぶ。この物語は、同じ様に歌の力を扱ったオルベウスの物語ほど知られてはいないけれども、シュレーゲルの書いたものをブルフィンチが英語に訳し、それを又野上弥生子さんが訳して、岩波文庫で読むことができる。

アリーオーンは、コリントス王ペリアンドロスの宮廷に住まっていたが、ある時、シケリアで行なわれたコンクールに出、名声をさらに高め、かつ多くの賞品を得た。コリントスへ帰る船旅の途中、その賞を目当てにした水夫達に殺されようとした時、彼は、暫くの猶予を求めて衣服を改め、死に望む歌をうたった後に、海に身を投じた。けれども歌の力は大きく、音楽を慕って集まって来た海豚の背にのせられて、彼は無事にコリントスへ帰り

着く事が出来た。一部始終を聞いたペリアンドロスは水夫達を呼び出し、彼等は罪を認めざるを得なかったが、アリーオーンの乞いによつて命を救われた、と言うのがそのあらすじだ。

こんな風になると、もとの物語の香気が抜けてしまつて残念だけれども、オルベウスの原神話風の悲惨な最後に較べて、この物語の明るさはどうだろう。ギリシャ神話の中では、殆んど何時でも荒らびた相貌を見せる海が、ここでは珍しく穏やかに微笑んでいる。この海を、古典古代風の、と呼んだらいけないだろうか。

鹿兒島に居た頃、一年に満たない短い期間だったけれども、友人と共同で、小さなヨットを持っていたことがある。鹿兒島湾

は、その為にはとても良い所で、風も波も外洋に較べれば遙かに穏やかだったし、帆走の目的地になってくれるような小さな島もいくつかが有った。ぼくたちが艇を舫っていた磯公園のすぐ前の浜から、対岸の桜島までは、順風ならば三十分程で行くことができ、ぼくたちは、無人島のつもりその浜で、誰が飲みものを買いに近くの店まで上ってゆくか、よくジャンケンで決めたものだ。

こうした帆走の合間に、一度、海豚の群に出会ったことがある。海豚はよく船に従いてくると言われているけれども、彼等は、ぼくたちの小さな艇には興味も無いのか、そばへ寄ってゆくと、サッと潜っては、とんでもない速くに浮び上るのだった。ぼくたちの誰でもいい、アリーオンの様に歌えたら良かったのだが。

こんな風に、海は今でも、明るく穏やかな姿でぼくのイメージの中に残っているが、だからと言って、天気の良い日にだけ帆走に出ていた訳でもない。台風の前日に強風の中に入り出し、いつもなら二人で操れる艇に、三人で乗っても傾きを抑えることが出来ず、ずぶ濡れになったこともあるし、突風の風下に桜島の

溶岸地帯を控えて、生命の危険は無いまでも、艇を駄目にしてしまいそうになったこともある。ぼくたちは、誰一人として正式にヨットを習ったことが無かったから、そんな時には、本に書いてある事を、できる限り状況に合わせて応用するしか方法がなかった。それでも、一度も転覆したりせずに、歩くのも嫌な程疲れきりながらも元の岸に戻って来られたのは、海がぼくたちに優しくったからにちがいない。

ぼくたちが、怖しさと忙しさとに自分からのめり込んでゆかない限り、海はぼくたちに優しくかった。ぼくたちは、自分の賢さを信じることなどできはしなかったけれども、帆をどの様に張ったら艇を出せるか試してみることができ、そして、そうする事が、むしろ楽しくさえ思えたものだ。そんな時、海は、ぼくたちには想像もつかない怖い現象を持って、ぼくたちを滅そうとしているものではなく、自らの法則に忠実に従おうとしている様だった。この海を、古典古代風の、と呼んだらいけないだろうか。

こうした考えは、海を仕事の場に行っているのではないアマチュアのヨット乗りの、その中でもさらに海を知らないぼくの抱く、ごく卑少なものにすぎないのかもしれない。けれども、ぼくの中で、海は、いつでも明るく穏やかに、白い帆を滑らせて光っている。

(国学院大学)

海の夢



秋山達子

地中海の海の色は濃紺とエメラルド色で、美しい宝石のように輝いている。しかし、冬の北海海岸に立つと、これも同じ海かと思われるほど、灰色で、暗くかすんでいる。海はその土地の雰囲気をそのまま映しだし、毎日の空模様を通り、いろいろと感じを変える。だから、一口に海といってもさまざまで、その人の育った環境や、性格や、そして、その日の気分によって、心に思い描くイメージは同じものではない。

海は毎日のどこからともなくあらわれてくるその日の気分を誘いだすと同時に、はるか昔の、こども時代の思い出や、さらに昔の人類の古い古い記憶まで呼びさますような気がする。日本の海は公害で、すっかり荒れてしまったけれど、浜辺の砂の上をはだして歩くと、さくり、さくりと不思議な湿った砂の感触が伝わ

て、ふり返ってみると、ところどころ波で洗われて消えてしまった足跡が、断続的に見え隠れしている。人の記憶もまた、同じようなものではないだろうか。

ずっと前に、夢のセミナーをした時、知らない間に皆の話が海の主題に集まってしまった。無意識的な世界に近づくと、最初の水があらわれるとユング心理学ではいう。だから、自分の無意識の世界をのぞいてみよう、意識して夢の世界に近づくと、海の光景を見ることが多い。はるか向こうの離れ小島まで泳いでいったら、美しい青花が一面に咲いていたという、海上の楽園のような夢を見た人があった。この夢などは、むかしむかし、海の方うにあったという蓬萊の島の話の思い出させる。マルコ・ポーロは、中国まで来て、さらに東の海上にあるという黄金の国、日本

島に憧れたという。

反対に、海の恐ろしいイメージでは、ヒステリー発作で失神する寸前に、高波に引きこまれて、海の深みに連れ去られるというような夢を見た人がある。高波や洪水の夢は、いつもヒステリーの発作と関係があるわけではないが、心の奥から、わけのわからない激情が襲ってくるような時に見ることが多く、いろいろな感情が騒ぎたてて、不安な感じのする思春期に見ることが多いといわれる。

普通の時によく見る海の夢は、たとえば、海と陸地の間を歩いていると、ひたひたと足の甲に水しぶぎがかかるような光景で、これは光景という視覚的なものより、足にふれるやさしい、柔らかな水の感触にかかわる気分を思い出させることが多い。

海の中には竜宮があつて、乙姫様がいたり、宝物が隠されたりしている民話や、お伽話が沢山あるが、海の底にはなにか非常に大事なものが潜んでいるような気がする。仏教の『大乘理趣六波羅蜜多經』というお経には、昔、ある商人の息子が、父母の貧苦をみかねて、竜王に守られて海中にあるという如意珠をとりに行く話がある。如意珠は、真陀摩尼とも呼ばれるが、これはサンズクリットのチンターマニという言葉を音訳したもので、この話は、もともと古いインドの民話が伝わったものようである。

同じような話は、シリア伝承のグノーシス的なキリスト教の聖典にもみられる。キリストの双子の兄弟といわれるトマスの『トマス行伝』の中に「真珠の歌」とよばれる一節があつて、そこでは東洋の一王子が蛇に守られている真珠を求めて旅にでかけ、さまざまな試練を経て無事帰国するまでの物語である。どちらの話も、おそらく同じ起源のものが伝播したのかもしれない。しかし、どちらも仏教やキリスト教のような宗教の中にとり入れられて、東洋と西洋に知られたのは、海の与えるイメージが、世界的に誰の心にも、なにか神秘で、得難い宝を秘めているような印象を与えるからであろう。

海は美しい、そして恐ろしい。海辺の岩の上で、じっと波のうねりを見ていると、いつの間にか、海の底に引きこまれていくような気がする。海の魔力に魅かれて、犠牲になった人も多い。海浜の丘の上に、ふと見かける小さな社は、海難を避けるための漁夫たちの守り神であろう。マルセイユにあるノートルダム・ド・ラ・ギャルド寺院は、海難にあつて無事助かつた水夫たちが、小さな舟を献納するという。やはり海は、ノートルダムといわれるように、我らの聖母であつて、すべてのものが永遠に回帰する永遠の母の面影を伝えるものかもしれない。多くの若い男たちが海に憧れるのも、そのためかもしれない。

(大正大学)

子どもと共なる日々

こどもたびごっこについて



梶田正子

久しぶりに、一年前まで住んでいた団地の遊び仲間が、我家に集まった。四歳、六歳、一年生、二年生、三年生の男女、六、七名である。

「何してあそぶ？」

「何しようか」

「……こどもたび!!」

「うん、いいよ」

子ども達の相談は、早速にまとまった。きいていた私は、予想通りの結果に、思わずおかしくなってしまった。それほどに、この仲間は、「こどもたび」「ごっこが好きなのである。

耳なれない名前のこのあそび、子ども達の説明によれば、

「子どもだけで、旅をして行くあそびなの。だから「こどもたび」「っていうの」だそうである。二年以上も前に、この仲間たちの中で生まれ、それ以来、爆発的にそればかりであそぶということはないが、かなり頻繁にくりひろげられ、楽しまれてきたあそびである。一体、このあそびの何が子ども達をそんなにひきつけるのだろう。早速にあそびの雰囲気に入っていく、生き生きとした子ども達の姿をながめながら、私はふと、そんなことに思いをめぐらしてみた。

このあそびは、まず「たび」に必要な乗物づくりから始められる。部屋の中の移動可能な椅子、テーブル、ワゴン、重くて動かないソファからはクッション、その他、子ども達ができるような家具のありったけを集めて来て、それをならべながら作って行くのだが、面白いことに、椅子やテーブルはすべて、さかさまにしたり、横倒しにしたり、二つ以上を組み合わせたなどして、ふつうの形では使わないことである。そうすることによって、子ども達もぐり込んだり、すっぽりとハマったり、ねそべったりできる思いがけない空間が生まれるからであろう。

それにしてもここ数年、新しい家具など何ひとつふえない我家であるが、その毎度同じ素材から、子ども達が作り出す組み合わせやならべ方の、いつも何と新鮮で豊かなことだろう。このようなダイナミックな創造活動が、このあそびの大きな楽しみのひとつになっていることは、子ども達の生き生きとした動きや表情からしても、まちがいないようだ。見ている私まで楽しくなってしまうのだから。

このようにして作られる乗物であるが、二年余の間には、子ども達の興味の所在や生活経験などによって、実にいろいろな種類のものが登場した。たしか一番最初は、ギッチラコ

ギッチラコとくぐボートのイメージであったと思うのだが、友達が飛行機で九州まで旅行したなどという話を誰かが学校で聞いてきた時には、しばらく飛行機が作られ、またある時、横浜に入港した豪華客船を見せに連れて行った時には、クイーン・エリザベス号がひとしきり続いた。これらの組み合わせ型もあらわれた。男の子達が戦争ごっこに熱中していた時期には、潜水艦にもなったし、子ども達の興味がスーパーカー一辺倒になった時には、椅子やテーブルのスーパーカーまで作られた。しかしさすがにスーパーカーに対しては、「スーパーカーじゃあ、いっぱい乗れないから、旅なんてできないよ」

という年長の子どもの意見が出て、結局、

「旅行だから、キャンピングカーにしよう」

と変更になったけれど……。

さて、家具をならべての乗物がだんだん構成されて行くにつれ、いよいよ「ごどもたび」のイメージがそれぞれの子どもの中にふくらみ、展開されてくる。幸いなことに(？)、この仲間の一人として、実際に飛行機や豪華客船やキャンピングカーなどを使っての旅行はしたことがないので、彼らのイメージは現実に制限を受けることなく、人から聞いたり、テ

レジで見たり、本で読んだりの種々の知識が次々と組み合わさって、実に豊かにひろがって行くところが楽しい。

さかさまにひっくり返したテーブルの中に入り込み、よきよきとつ立っているそのテーブルの足を操縦桿のつもりで握りしめながら、

「おっ 島が見えたぞお。着陸用意はいいかあ」などと叫んでいるTちゃんがいるかと思うと、横の方の椅子の所では、女の子のYちゃん、Tちゃん、Eちゃん達が、ままごと道具を並べながら、

「今日のごはん 何にしましょうか」

「違うわよ、飛行機は、スチュワーデスがみんなの食べたいもの きいて配るのよ」

「それじゃ あたし スチュワーデスノ 子どものスチュワーデス」

「あたしもノ だって、スチュワーデスって一人じゃなくても、いいんだもん」などと言っている。

R君は、Tちゃんの着陸用意の声をきいて、

「もし、島に海賊みたいのがいたら、これで、うっち

やうんだ」と言いながら、ブロックで何やら一心に作っている。一方では、M君が、一度ならべた椅子を再びあちやこちへ動かして直していたが、

「ちょっと どいてえ。もつと広くなるんだから。あつそうだノ これ ふねにしようか」

「ええつ、ふね？ だって今、空飛んでるんだよお」とTちゃん。

「そうか……」と言ったものの、あきらめきれないM君は、「じゃあ いいこと考えた。海にも入れるの、あつそうだノ Tちゃんのは、船から飛び立つ飛行機、ね、いいでしょ？」

「……うん……でも、たいていの時、飛んでるんだよ」「いいよ、じゃあ、ここからこっちが飛行機で、こっち船ね」

すると、さっきのYちゃん、Eちゃん達、

「あら あたしたちの乗ってるよ 船ですってよ」

「なんだあ。あたしスチュワーデスがよかつたのに……」

……Tちゃんの方に乗りかえたいな」

「いいよ、じゃあ待ってて。もうじき着陸してあげるから」

「あたしは船の方がいい。だって船だったら、広いからパーティもできるもん。そうだ！ 今日、うそっこにEちゃんの三歳の誕生日にしない？」

大きな容れもの的な要素があるようである。だからこそ、二年余りもの長い間、この子ども達の中で、常に魅力あるあそびとして楽しまれ続けてきたのだろう。

なにしろ七、八人もの年齢も性別もちがう子ども達であるから、必ずしも個々の興味やイメージが一致するとは限らない。いや一致しない場合の方が多い。それを子ども達は、うまく具合にお互いの接点を見つけ、自らのイメージを限りなくふくらませながらも、ひとつのまとまったあそびの意識の中で、その楽しさを更に増幅させている。そしてこのひとつの大きなあそびの中にあるという意識は、同時に、この仲の良いあそび仲間の一員であるという安定感とも、だぶっているように見受けられる。「こどもたび」には、そんな大きな

子どもの中で生まれ育まれ、好まれてきた「こどもたび」であるが、さて、この先いつたいこのあそびはどうなるのだろうか。この仲の良い遊び友達も、やがてはバラバラになっていくのかもしれないが、「こどもたび」も、それと一緒に消えてしまうのだろうか。それともメンバーは離れてしまっても、彼等の中に、何らかの形で、そのわずかな部分でも、とどめられるものだろうか。子ども達の傍でそのあそびをながめ、共に楽しさを味わってきた私には、愛着と共に、何とはなしの感傷をも感じさせる「こどもたび」ごっこである。

みどり会夏季合宿研修会

期日変更のお知らせ

五月号でお知らせしました開催期日
が一日繰り上がりまして、22日(火)
23日(水) 24日(木)となります。

——みどり会研究部



子どもの活動と保育空間（その二）

堀井 仁子

スペース保育の朝

「おはよう♪」と元気な声で、ベランダから登園して来た子どもたちは、まず、カバンの置き場が変わっていることに戸惑い、不安そうである。しかし、保育の誘導で持物の整理をはじめ、子どもたちは、いつもと違った室内を見まわし、落ちつかないが、保育が、

「ほら、あそこに、オバケのバーババの絵本（子どもたちの大好きな絵本）があるわよ」

「ブロックや積木もあるわ。すきな所で、あそんでいいのよ」と、声をかけると、バァーとかけ込んでゆく子ども、モジモジと行動に移せない子どもなどさまざまだった。

保育は、活動空間の中へは、入りこまず、全体を見わたせる所に位置し、子どもたちを誘導したり観察をする。

坂本さんは、

① 子どもや保育と接触はしない。

② 10分間隔に、あらかじめ準備した平面図に子どもの活動を記入してゆく。

それぞれのスペースでの子どもたちの活動は、三歳児の場合（前号 図15を参照）を例に取れば、

● 集まるスペース

設けられた集まるスペースは、食事のスペースと重複的に利用したが、出席した十一人の子どもに対して、ちょうど良い広さ（面積として六畳間の広さに相当）であった。そして、間仕切りとして使った家具の高さ（八十七センチメートルぐらい）も

保母にとっては、子どもを把握できるが、子どもの視界をささげるため、適度な高さだった。それらは、ややオープンな活動においては、「私の場所」として、安心して活動していた。

● 絵本のスペース

静かな活動の場所として、奥まっているため、子どもが飛び込んで来ることもなく、常に、四～五人の子どもが、落ちついて、自分たちのすきな絵本に集中していた。

● 室内の砂あそびのスペース

ポリ製のタライに砂をいっぱいに入れたものをふたつ用意した。ひとつのタライに三～四人の子どもがあそぶには、ちょうど良い大きさだったが、ふたつのタライの間隔が狭かったので隣りの子どもとぶつかりあった。その上、ものめずらしさも手伝い最高九人の子どもが、集中し、スペース全体が過密となった。少しでも余計にあそぼうとする子どもたちがせりあい、十分あそぶことができず、トラブルが起き、あそびは長続きしなかった。

結局、目新しいものを取り入れる事は、慎重で、かつ、十分な準備が必要のようだ。

共同研究者と職員との話し合いの中から

活動空間（スペース）を設けるために、担当保母が、平素、子どもたちの慣れているあそびなど、いくつかのあそびを取り上げ、その中からワン・ルームの保育室で可能な広さ、条件を持つものを平面図に配置してみる。

この平面図をもとに、建築サイドの坂本さんによって、検討・修正される。

建築的な（保育を行なう空間としての）基本がここで保育と合流し、より効果的なものとなる。例えば、通路は、具体的に何センチ取れば良いかとか、子どもが椅子にすわり食事をするためには、どのくらいの面積が必要かとか……。他の活動空間との兼合いで、それらを総合した上で、決定している。

第一回目のスペース保育を実施した後のミーティングでは保育者・建築家両方からさまざまな意見がでた。

1 集まるスペースは、是非必要である

子どもが安心して、自分の「場」を確保できることにより精神的に安定する。

限られた活動空間の中で、いくつかの活動の場として、重複し

て使うことができる。例えば、お集まり、食事、テーブル・トイレなどであそぶ静的な活動等々。

2. 午睡のスペースについて

計画の段階でも、既存の保育室であるため、十分な面積が確保されないままでの実施だったが、やはり狭かった。テラスから便所へ行き来する時など、通路を取ることができなかつたので、ふとんを踏んで通る有様となつてしまつた。

3. 敷物を敷いただけのスペースでさえあそび方がかわる

子どもたちは、「場」の意識を持ってその中であそぶ。そばを通る子どもも、中をのぞき込んだりするが、あそんでいる子どもは、あそびをする事はない。ブロック・小型積木等は、このスペースでどっかりと腰をおろしてあそび、長く続き発展する。

スペース保育から得た保育効果

「とにかくやってみましよう」と、実施したスペース保育から保母は、たくさんさんのメリットを見出し、今後、研究を続けて行く気持ちを持たせて持ち始めた。しかし、年度末・年度始めの混乱する時期での実施は難しいので、各クラス独自にひとつのスペースを設けて、その中での子どもの活動を見守つていった。

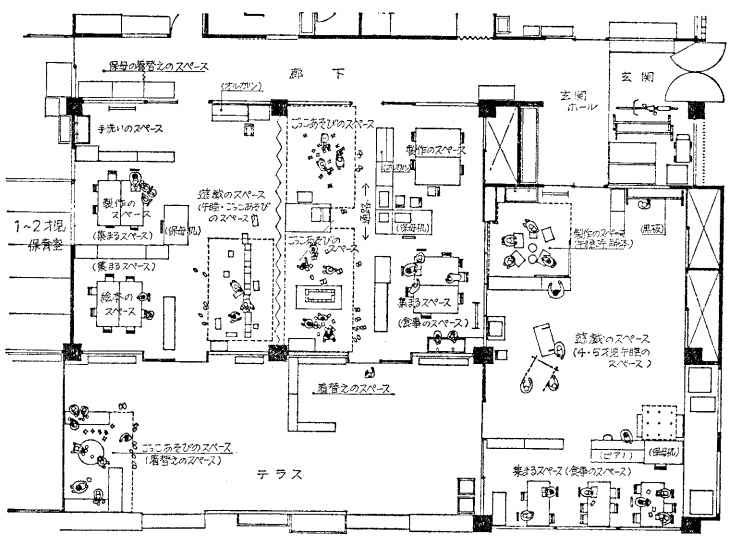
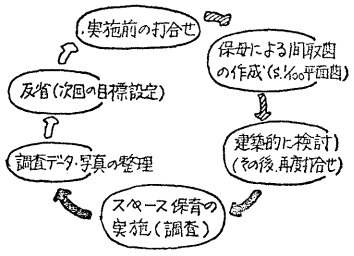


図 6

図一6 年齢別のスペース保育 (S50. 5.16 AM. 9:50)

二回目の実施は、五月十四日から二週間。一クラスに、三〜四か所の活動空間を設けた(図16)。一回目の諸々の反省を経験として、ミーティング(図7)を十分に重ねたため、子どもたち、保母の戸惑いは、ほとんどなかった。その上、徐々にはあるが、「保育空間を、いま一度、考えなおそう」という気持ちの方が保育者自身に高まりつつあった。



図一7 研究方法のダイアグラム

五月末のお誕生会で、一日活動空間を解体したが、六月に入つて、第三回目のスペース保育を二回目の形態に修正を加えて、実施した。

この三回にわたるクラス別のスペース保育を実施して得られた保育効果は、以前の保育と比べて、

- 子どもの状態について

全体的に、落ちつきが見られ、なおかつ、集中する時間が長くなってきている。

実際に、これまでは絵本もパラパラと絵をめくるだけのことが

多く、周囲のあそびに目を向けたり外部からの刺激により中断することが多かったが、絵本のスペースに入った子どもたちは、二〜三人で絵本を見ながら話合ったり、自分の好きな本に熱中している時間が多くなった。また、自分の好きな本の物語を、ごっこあそびなどに取入れ始めて来ているのは、内容理解が深まって来た、とても良いのではないかと？

● 保母・用務員の労働について

保母は一日最低三回(食事・午睡・おやつ)の準備)机・椅子を移動させなければならぬ。これら unnecessary 労働がなくなり、その分、子どもたちにお話を読んで上げるゆとりすら出来るようになった。

一方、用務員の方からは、保育室が細かく仕切られているので、掃除器や、モップがかけにくいとの意見が出た。しかし、掃除器のかけにくいところは、ほうきを使うなどの方法を考えてみることを話合った。

夏季の合同スペース保育

現状の中でできる限り活用できるスペース作りを考えて実施して来たが、面積の狭さはいかんともしがたい。そこで、七〜八月

園児のいくらか減少する時期に園全体を縦割りにする試みが実施される。

実施前のミーティングでは、これまでの反省をもとに、夏の暑さ等も考慮し、通風・採光・日陰など、できるだけ気持ち良く過せるスペース作りを目指した。

今回は、園全体での取組みとなり、各々、自分の意見を出し合い調整して、図18のような配置計画でスタートした。

しかし、幾日も実施しないうちに、いくつかの問題が起きた。それは、クラス別とは違い、大人数ではやはり狭かったり、また、子どもの人数が多い割に、広さをあまり、必要としないことなどであった。暑さについての問題では、スペース内に入る直射光を避けるため、カーテンを引いたが、かえって暑苦しかった。これが、レースのカーテンなど、涼しさのあるものだったら良かったのだが……。

そこで、坂本さんが、保育の意見を取りまとめ、話合いの上、図19のように変化させていった。

七月三十一日からの合同スペース保育

今回は、特に、異年齢の子ども同志の交流と、五歳児を中心と

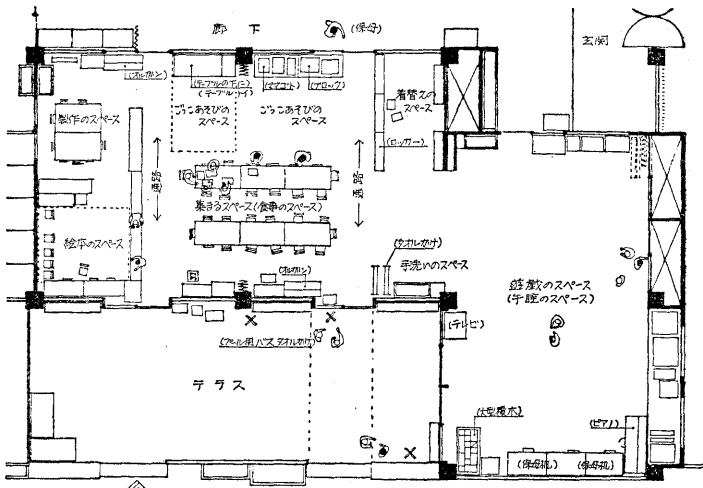
したあそびの発展があれば……と期待しての試みであった。子どもたちに、きのうときょうの違いに気づかせながら新しい設定場所を確認させてから、保育が、

「いろんなあそび場があるけど、みんな、いちばん好きな所であそぼうね」

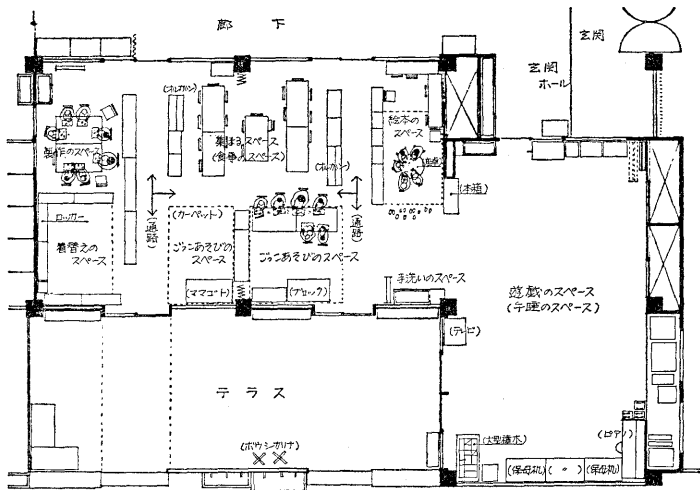
と、言葉かけると、子どもたちは、スムーズにそれぞれのスペースに散って行く。積木のあるスペース（ごっこあそびのスペース）には、五歳のあや・よう子を中心に、二歳のリエ他二・三人が自然にグループを作ってあそんでいる。箱型積木を机の上で使っていたが、だんだん発展して、カーペットの敷いてある方まで広げてあそぶ。

当初、意図した異年齢の交流は、目的に近く達せられたが、五歳児は、思いのほか、リーダー・シップを発揮しなかった。それは、常に、リーダー・シップを取っていた子どもたちが、休みがちだったからか？

おもしろいことには、同年齢同志のあそびよりは、異年齢のグループの方が、あそびが長続きすることが見られる。年上の子どもが年下の子どもへのいたわり・思いやりが現われるため、反対に同年齢で力関係が同等だと、えてしてトラブルへと発展しやすいことなどが見られた。



図一八 合同のスペース保育 (S50. 7.28 A.M. 9:10)



図一九 合同スペース保育 (修正後) (S50. 8.11 A.M. 10:00)

夏季のスペース保育は、現状の保育室の中で、合同の保育が八月いっぱい実施されたが、比較的広さ等ゆとりすら感じられた。それは、子どもが定員の三分の二の出席であったこと、子ども・保育者がスペース保育にすっかり慣れたためであろう。

秋には、運動会の準備・お店屋さんごっこのため、積極的に製作のスペースを取り入れてのクラス別スペース保育、本番の合同のお店屋さんごっこへと発展して行った。

それはやがて、五十一年四月には、定着期に入り、その時期や子どもの特性に合わせてのスペース作りをクラス別に実施し、保育をより効果的に運営できるように保育者自身が常に気を配るようになって来た。

「空間を活用した保育」(保母の意見)

最初、難色を示していた高橋保母も、今では、次のように述べている。

『現代の子どもは、自主的にあそぶなくなっていると、よく言われる。広い場所、のびのびとひろがる原っぱで何をしていいかわからない子どもがふえている。』

『どうしたんだろうね、今の子どもは?』と、おとなが言う前

に、小さい頃からあそびを生み出す訓練のなかった事、考えさせ展開を見守ってくれるおとながいなかった事に、目を向けるべきだと思うの。そして、集団の場においてのしつけや規律の中で、おとなが動き、子どもをその枠の中で監視しているような面があるのではないかと……。

『子どもはあそびの天才だ』と思っている私にとって、もっと深く、子どもにとってどのようにしたら良いのかと考えながら保育を進めてゆきたい。

それには、その空間に慣れる事。そして、例えば遊具は一か所にあり、どこからも簡単に選択が出来たり、固定してあったり……。子どもが、

『あつ、今日はあれやりたいな』と飛びたくなくなるような魅力のある遊具の配置ができたらと考えています。また、せっかく作りかけた、展開しかけたあそびを日案の時間によって断念しなくてもいいような配慮ができたらと思っています。

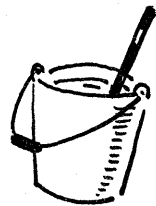
監視の目からのがれ、ある時は同年齢、ある時は異年齢であそんだり、けんかしたりして、子どもたちの心のふれあいによって、子どもらしい成長がこの空間を活用して、生れるのを見守れたいと思います」

(板橋区弥生保育園)

≡ つづく ≡

大人になってゆく子ども

磯貝保子



子どもたちの成長の跡を、いくつかのトビックスを拾いあげて、断片的につづつてみようと思います。

☆描画のはじまり

ある日、はじめて、娘は部屋の壁に鉛筆でなぐり描きをしたのです。一歳四か月のことです。これは、波形なぐり描きの一種と言っているでしょう。一歳十か月には、円形なぐり描きがあらわれました。

二歳三か月目、大きな円を描き、その中に点々を打って、「おうち」「おめめ」、さらに六本の線を下に縦がきにして、「ママちゃん、めんよしてるの」

これが人物を描いた最初です。

それからは毎日、模造紙を壁にはっておき、描きたい時にはいつでも描けるよう、まわりにクレヨンを置いておくようにしたのです。描くことを要求したり、描く場所を指定したり、直したり、また何を描いたのかをたずねたりするようなことは、一切しませんでした。ただ何かを描いた場合は、娘が口にしたことだけをつけ加え、日付を書いて保存し、新しい紙と、とりかえておいたのです。

その一週間後には、描きながら、「おつむ」「おめめ」「ほつべ」「おうち」「赤いおくつ」などを口にし、さらに、この一か月間に加わったものには、「おはな」「おみみ」「あご」「おてて」「りぼん」「おむね」「おへそ」「スカート」「たっほ

などがあります。

しかし、一日、一日を詳しく注意して見ると、「あご」を描いたときには、「おくち」がなかったし、「おみみ」のあるときには、「ほっぺ」が描かれないというように、一方が描かれれば、他方が描かれずということを知りかえしながら、すこしずつ人間の姿が出来上っていったようです。

指を手の先に、細かく描写したのは二歳五か月、眼や口に輪郭が描けたのは三歳、三歳半になると、眼・鼻・口のすべりに輪郭が出来ました。この頃、手は、顔にあたる部分から直接左右に出ています。そして三歳七か月には、胴の輪郭が出来ました。

すこし時間をとりますが、洋服を着て、靴をはいている女の子が完成するのは、六歳四か月前後になります。この間、全くお手本を示すことがなく、また注文をつけたりしなくても、他の多くの観察者が記録したのと同じように、人物画が完成されていく過程は、私にとって興味のないものでした。なかでも身体の部分部分が一つずつ加わるのではなく、描けたり消えたりという消長をくりかえしていく姿は、印象的なものでした。

☆遊ぶすがた

息子は二年生の夏から、自転車を乗りまわすようになりました。団地内とはいえないものの、バス道路もあり、かなりの交通量です。二・三人、多くなると七・八人のグループで自転車をつらねて走り廻るのです。救急車の音にハッとされたのもこの頃です。

夕ぐれ時になると、心配でベランダに立ったり、外に出たりして帰りを待ったものです。勢いよく走ってくる子どもの頬が夕日に映え、一層赤く見えました。

この時期は、小学校のPTA校外活動の一つとして一月に一回、自転車点検がありました。点検には必ず行きましたし、自転車の乗り方について、細かく話して聞かせたりしました。

同じ頃はじめたものに冬のローリースケートがあります。学校から帰ると、三・四人のお友だちと、早速ローリースケートです。コンクリートの上で、よく転びました。すねが紫色になったことが何度もあります。しかし、こんなとき、「痛い」とは言いません。子どもというのは、自分のした

い事、あそびたい事に関しては、痛さのもり超えるものだと感心したものです。はじめてから一か月もすると、寒風の中、髪を逆立て、ジャンパーをふくらませながら、ローラースケートに興じている姿を、買物に出て、しばしば見かけたものです。

危険もいっぱいでしたけれど、あの子どもらしい、たくましい姿は今も忘れることができません。二年生そして三年生の冬のことです。

その後しばらくして、ローラーの音がうるさい、あるいは危ないという声が出て、PTAの集まりなどで話し合いが重ねられました。結局この地区では禁止になってしまいました。それぞれの事情もあり、禁止せざるを得ないこともよくわかるのですが、こうして子どもの遊びが一つ消えていききました。

この時期の、特に男の子の遊びを見ると、自転車にしろ、ローラースケートにせよ、野球であれ、多少の危険は、いつもつきまとっています。また付近の住民にとっては、うるさかったり、多少の迷惑さもつねに含んでいるように思われます。しかし、それ等の遊びを通して、子どもは大きく成長していくものだということを肌で感じることができます。

自転車乗りや、ローラースケートをしたことで、息子の足が、固くたくましくなったことが、さわってみて、はっきりわかりました。子どもたちが自ら求める遊びの中には、その時期の発達にかかせない自然の要求があるように思えてなりません。そして、その時期を逃がしたら、再び、その要求を満たしてやることは、むずかしいことでしょう。

今日まで、幸いに大きなケガもせずすんだので、このように言えるのかもしれない。

☆自然とのふれあい

日本アマガエルのこと

三年生の六月のことです。友だちと遊びまわり、夕方戻ってきた息子は、紙の袋を差し出して「カエル、飼ってみるんだ」というのです。みると、黄みどり色の小さな蛙が四匹入っています。二キロ程はなれた田んぼの付近でつかまえたというのです。

プラスチックの水槽に大小の石や草を入れ、水をすこし入れました。あみ目の蓋をして、蛙の住み家は出来ました。息

子は四匹の蛙にそれぞれフォーリーブスのメンバーの名前をつけました。

「ター坊、こっちは向いて……」

困ったのは餌です。蛙はハエやカをたべるということで、夕方になると多摩川の土手にアミを持ってとりに行きました。とってきた小さな虫が、うまく水槽に入ると、蛙は上手にとびついて、ハエやカをたべるのです。時には、水槽に入れるのに失敗して、部屋の中をカやハエがとびまわるということもありました。

ところが六月のこと、雨の日が続いて、餌をとりに行くことができなくなりました。蛙は日に日にやせて、息子が困っていると、ちょうどラジオの子ども電話相談室で「蛙の飼育方」を尋ねた子がいました。「蛙の餌には挽き肉を糸の先につけて、たらしやるといい」とのこと。早速、木綿糸の先に挽き肉や、ハムをちぎってつけ、入れてみました。でも下げてみるだけでは蛙はとびつきません。糸をほどよく動かすと、よく飛びついてたべるのです。

家中の者がおもしろがって、蛙に餌をやるのを競争しましたが、上手なのはやはり息子でした。こうして二か月ぐらい、小さな蛙たちは、息子の友だちでした。手の上ののせて

遊びに出かけたりもしました。でもすこしずつやせていくように見えて、可愛そうになり、もとのところへ放しにいったのです。

「餌を沢山たべて、満足してアクビ(?)していた顔、とても可愛かったなあ。」

しばらく経った後でも、息子はそういつてなつかしそうにしていました。

それから一か月後、次のような記事が新聞の科学欄にのりました。早大理工学部のグループが、「人工カエル眼」を作ったというのです。蛙の眼は、非常に面白い機能を備えています。眼の網膜が特殊な構造になっていて、静止物体にはぶく、移動物体に対しては鋭敏である。蛙はハエなど動くものに対しては、百発百中の正確さでエサを捕捉することができ。かりに車の走っているビル街を蛙に見せたとすれば、蛙に見えるのは走っている車だけであると。

息子と私たちは、この記事を読んで、なるほどと感心したものです。息子が一番餌をやるのが上手だったのも、彼の動かし方が、蛙の網膜のメカニズムに、最も適していたからなのでしょう。

カタツムリのこと

同じ頃、カタツムリを育てたことがあります。当時の担任の先生が、クラスの子どもたちにカタツムリを一匹ずつ下さったのです。

プラスチックの容器に土を入れ、餌にはキャベツをやりました。乾燥しないよう、霧ふきで水分を与えました。

一か月ほどして、土のくぼみに小さな小さな丸いものが固まっているのを見つけたのです。六月の十一日でした。息子も私をはじめたのことで。

「卵らしいね」

それから毎日、息子は新しいキャベツととりかえては、のぞきこみました。卵を発見してから十九日目、小さなピンポン玉がパッとわかれて二、三ミリの赤ちゃんカタツムリが誕生したのです。ちゃんとうずまぎの殻を背にしています。数えたら二十六匹いました。

この三日後、親カタツムリは尾の方を土の中に入れて、また卵を産みました。これは十四日目に十六匹かえました。

こうして、ほぼ一週間おきに、ひとかたまりの卵を産み、約二週間ぐらいの間にカタツムリがかえり、六・七・八の三

か月の間に、一匹の親から、一九八匹のカタツムリが生まれたのでした。これらの赤ちゃんカタツムリは間もなく、野原に放してやりました。この頃、息子の描いた絵には、親カタツムリのまわりに、小さなカタツムリが沢山描かれていました。

「このカタツムリ、雌なんだね」

と息子はいいました。でも親カタツムリは一匹だけでした。しばらくたってから、私たち親子は、カタツムリが両性の役目を持っていることを、本で知ったのです。

わが家の水槽は、金魚が泳いでいることもありましたが、それよりも蛙とかカタツムリ、そのほか、多摩川から息子がとってきたザリガニ、くちぼそ、めだか、タニシなどが住んでいたことのほうが多かったです。

四十七センチ四方の容器の中で、小さな生きものたちは、いのちの不思議さを、おしえてくれました。

わが家の水槽は、自然のひとつの縮図であったようにも思えますし、息子が身の回りの世界へ眼を開いていく窓口でもあったようです。

☆創るたのしさ

五年生から六年生にかけて、人形作りに熱中した時期があります。娘ではなくて息子の方です。娘はこの頃、もう大学生になっていました。辻村ジュサプローさんの人形が出演するテレビの人形劇「新八大伝」がきっかけでした。

とにかく、ものを創ることは好きで、野球ゲームも自分で空箱を利用して作り、しばらく楽しんでいました。この時は古いテレビの強力マグネットをとり出して、カーブやシュートができるようにしてありましたし、ホームベースに穴があくようにして、「消える魔球」も投げられるのだと得意でした。市販のにくらべて見栄えこそしませんでした。が、機能的には十分ととのっていたようです。

ところで人形作りですが、はじめは色画用紙を切りぬき、ボードで貼り合わせ、テレビの「新八大伝」の人形と見くらべながら、つくっていくのです。とくにこったのが顔でした。頭の中には、犬山道節なら道節なりのイメージがあるのでしょうか、なかなか気に入る様に描けないでしょう、一つの人形の顔を、くる日もくる日も描きつづけたことがあります。

ます。その執念というか、根気づよさに、何かこわいような感じさえうけました。しかし本人は別に意気込んでやっているという風でもなく、淡々として、その描き直しを楽しんでいるようでした。

ある日、工芸店で和紙に目をつけた息子は、これを買ってきて、再び作り直しをはじめました。和紙の持つしなやかさで、髪の毛が一層上手につくれました。

この根気づよさが、いつの日か勉強の方に向けてくれたら……と思った日もありました。

* * *

断片的なトピックスをあげてみましたが、これらは、子どもたちの成長の一コマにすぎません。成人式をむかえた娘は、これから大人として社会に出ていかねばならないでしょうし、中学二年生になる息子は、受験という壁を乗り越えていかねばなりません。

子どもときの、楽しさとはちがう、人の世の喜び、悲しみに出会うこともあるでしょう。元気で、歩みつづけてほしいものです。

海に想う

山柘雅信

私は港横浜に住み、幼児のときから何十年と夏を葉山の海岸で過してきたので海の想い出はきわめて多いが、二つのことを記したい。

第一は二年前のことである。お茶の水女子大学が行なわれた「幼児の自然認識」の研究会に参加して、砂遊び・水遊びの事例報告を聞き、さらにまんとみ幼稚園をたずねて、元気な子ども達に接したとき、遠い昔の海が、急によみがえって強く心に迫るのを感じた。

砂場の遊びはせせこましいものとの予想に反し、砂を掘り、盛り上げるためには渾身の力と強い意志がそがれ、そうして作られる山や川や海は大きいスケールが示される。水は泥水であつても子どもの手や指の間を流れるとまことに清冽であつた。私は子どもが水や砂の理を身体で悟り、これを物に適用して遊んで生長する姿を知つて、「自然は神が人間に与えた恩物ではないか」といふ今まで探し求めていた科学技術の心を教えられたのであつた。

第二は少年期以後の私に、やはり葉山の海で天文学・水泳・ヨ

ット操船を覚えてくれた父の海の生涯である。父は日本の海運興隆期の船長であつた。その学生時代より内村鑑三に師事し信仰を教えられ弟子として愛された。

船乗りとクリスチャンとは日本では一見不思議な組合せのようであつたが、そうではなかつた。それは多くの人命と高価な船と物資を安全に搬ぶためには、まず遠い不動の天体を観測し精確な計算で大洋上の位置を知り、暴風雨の中で波浪を相手に果敢な操船をなし、陸に近づけば浅瀬を避けて船を慎重に港に導くその仕事は、大いに信仰にたすけられたのであろう。

内村鑑三には、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、メキシコに弟子達の集団があり、父は先生の代理として航海毎に訪問して喜ばれたと聞いている。あらたまつてする説話は不得手な父であつたが、広い海を危険と困難にたえて祈りながら航海すること自体が、恩師の教えと愛を雄弁に伝え、また恩師の心を広い世界につなぐことになつたようである。津守教授がミネソタ大学に留学中、内村鑑三のアメリカ人の生涯の友であつたD・C・ベル氏の身内を尋ねられたとき、「内村からのこの贈り物をキャプテン山柘が

とどけてくれた」と象牙の人力車の土産物を示したそうである。

おわりに内村鑑三の海の詩を紹介する。

海よ、海よ、我を寛くせよ

俗界の権者我を囚にし

その古俗と旧習とは我を檻にし

我をして我が羽翼を伸し得ざらむ

我はかもめの自由を慕うなり

我はかいつぶりの飛力を羨むなり

無窮の靈を有する我は

この圧迫狭隘にたゆる能はざるなり

海よ、海よ、我を清くせよ

腐敗は平原都城を襲えり

山間の仙境また陋習に化せり

浩然の気、我今これを全土に求めて得ず

洋面いたるところ酸氣多し

海上波静かなるとき風に香味あり

清浄を愛する我の靈は

この穢、この汚にたゆる能はざるなり

海よ海よ我を強くせよ

配慮は我の英気を挫けり

辛勞は我の思惟を圧せり

我精我筋まさに縮減せんと欲す

濤上風に逆う時我に胆力生る

船頭舵を御するとき我に恐怖なし

活動を要する我の生は

この軟、この弱にたゆる能はざるなり

この雄渾な詩は、明治二十七年に出版した『地人論』の「海国」の章に載せられている。

山国は人をして自由独立ならしめるが一方人を頑固にし、平野は富の源であるが闘争の場となり市街地は腐敗を起す、しかし海は我々を清く広くし世界の民であることを知らず、と説いている。そして同書終りに次のように言っている。日本の港で米国に向つて東に開くものとアジアに向つて西に開くものが多いのは、日本が米国とアジアの媒介者としての位置を確定するものである。室蘭・横浜・四日市は東に、神戸・下関・長崎が西を向く……。日清戦争の直前にこのように日本と海に期待した内村鑑三は一生を通じ、今でも天国に向つて開く港と海と航海について教えつづけている。

(関東学院大学)

無人島にいだん子どもたち

宮内 正 民

国立室戸少年自然の家では、昨年七月に六日間にわたる「無人島にいだん少年のつどい」を開催した。私はその引率者として、

男女三十二名の少年たちと徳島県牟岐町の沖合にある無人島で生活をした。この催しは、少年たちに無人島で、できるだけ非日常的で、原始的、創造的な体験をさせることによって、不自由な生活の中でがんばりぬく精神力や、自然と人間のつきあい方の基本を身につけさせたいというねらいをもったものであった。対象は小学校五年生から中学校三年生までの男女で、七十名を越す参加希望者があったが三十二名に限定して参加させた。

まず少年たちは、国立室戸少年自然の家で一泊して準備を整えたのち、少年自然の家の練習艇「くろしお」(十二トン)に乗って、島に渡った。「大島」は海上約八キロの沖合にあり、周囲七・五キロの岩場の多い島で、ここには港がないので、入江の砂浜に

船を乗り上げて、まるで敵前上陸のように、ゴムボートを使った、泳いだりして荷物を降した。こんなことは予想もしていなかったが、みんながずぶぬれになって上陸する姿を見て、これほどの意気込みがあれば成功するに違いないと思った。

上陸が終ると予定通りテント設営などの仕事に取りかかったが、入江が狭く、子どもたちのほとんどが、キャンプ経験がなかったことや、暑さと蚊に悩まされ、おまけに予想外のマムシまで出てきて仕事はたいへん苦しかった。特にマムシは、テントのそばにも出没し神経を使ったが、マムシのことを子どもにも知らせてやるよい機会なので、生きたままのマムシを目の前に見せながら、その特徴を詳しく話してやったりした。結局五日間で三匹のマムシをとったが、これらのマムシは海賊料理の材料となって、逆に子どもたちに食べられるという始末になった。無人島の生活

で子どもたちはここまでたくましくなったのである。

上陸のとき、まっ先に海に飛び込んだM君などは、家に帰ってからママシを食ったことを近所に自慢して歩いたそうで、苦笑したものである。またM君は、性格的に弱く一人で寝ることができないので、両親が心配していたのであるが、かれが無人島から帰ってくると一人で平気で寝るようになったというのである。これは無人島の生活が、かれに自信を与え、たくましくしたにちがいない。

女子はさすがにママシの騒動に関しては、気持が悪かったようである。しかし、その女子たちも、木深い山がすぐ海にせまっている全く自然のままの大島での生活で、いささか野生化したようである。野性悪魔レンジャーとかいって山の上からよくウォー、ウォーと叫ぶのがたびたび聞えてきた。

考えてみれば、食事は大なべの煮物を、ボートのオールでかきまぜて作るような生活である。また木立の中に手作りした便所も海を眼下にして、眺めはよいが、蚊にブン、ブン攻められてゆっくりともできない有様である。

こんなきびしい生活の中にも大島の海はたいへん美しく、水中めがねをつけてもぐると、原色の美しい魚が泳いでいたりして、心をいやしてくれた。少年たちも魚をつったり泳いだり思い思い

に、海のよさを満喫した。無人島の生活をとおして、感想や保護者の意見を聞いたが、その中に少年の、「頭だけの勉強だけではだめだ」とか、「自分の好き勝手はできない」、「何もないところから作り出す喜びを知った」、「母親のありがたさがわかった」など自分の体で感じとったすばらしい体験談があった。

保護者は、現在の学校生活や、家庭での生活は充実しているように思いうけれども、何か足りないという疑問があって無人島のように参加させたが、きびしい自然の中で生活したことが、結果的に少年の日々の生活態度の中に力強いものを感じるようになったという意見が多く見られた。少年の中にも、自分が苦しいことに合って負けそうになったら無人島の生活を思い出すといったものもいた。

島を離れるとき涙を浮かべていた女の子、力強く来年もまた来るぞと叫んだ男の子、みんなもつと無人島の生活をしたかったにちがいない。大人と子どもが心を合わせて挑戦した無人島の生活、洞くつで寝たこと、山小屋をつくって寝たことなど、いろいろの思い出を残して終了したわけである。今後とも、近隣の仲間集団のよさがほとんど見られなくなった現在、このような催しをもっとふやして少年たちの日々の生活に体験的に刺激を与えたいものである。

(国立室戸少年自然の家)

はるかな海



飯沼佳子

私が初めて海を見たのは、小学校六年の修学旅行の事でした。

それは今から二十数年前になりますが、ところが、今、信州の子ども達の夏休みは海と切り離しては考えられなくなっています。

夏休みの一番の楽しみは海水浴です。身近な山へ出掛けるより海へ海へと山国の子どもはなびぎます。

私の子どもの頃とは隔世の感があります。二十数年前、そのころ小学生だった私には、海は、はるかに遠く実際行く事など考えられない所でした。一人私に限った事でなく、周りの子どもも皆同じ情況でした。海は心にも描けない存在でした。

終戦後の貧しい時代だったのです。いえ、正確には、今考えるところあの頃は貧しかったと思うだけで、当時、自分達は貧しいとは

考えませんでした。それがあたり前の時代だったので。子ども達の頃、夏休みどこかへ出掛けた思い出と言えば、母に連れられ、長い道を歩き、電車にすこし乗り……それも電車賃を浮かす為、目的地の一駅前で降り、又、長い道を黙々と歩き父親の墓まいりをしたその事だけです。私の家族だけがそうでなく、まわりもこれと似たりよったりだったと思います。ですから、私も、仲間の子どもも海とは全く異なった世界に住んでいました。海ははるかに遠く心に描くこともできない、生活の外の事だった気がします。

しかし、又、生まれて初めて見た海の印象も定かではありません。三保の松原の松が心に残るのみです。めずらしいとは言いません。

い松の木、しかし、日常見て来たそれとはちがう枝ぶり、松をとりまく風景の新鮮さが松の木の一点に絞られて思い出されるのかも知れません。

成長して何回か海へ行きました。と言っても指をおってその一つ一つを数えられる程ですが。それらの海は一つ一つ印象鮮やかに思い出されます。年甲斐もなくと笑われそうですが、旅に出て海が見える毎、思わず感嘆の声をあげてしまいます。

今、海を思う時、やはり、あこがれと言ってよい感情を抱きます。旅と言えば、海の見える所へと思います。

山と言う巨大な壁からときはなたれ、見わたす限り平らな海面に出合う時、それから離れられなくなります。自分の周りに作られている目に見えぬ壁が目の前の波にくずされ、広大な海がそのまま私の中に広がっていく様です。海にひかれる一つの故かも知れませんが、動かぬものの代名詞に使われる山、その山に囲まれた日常生活から、刻々と色も波の大きさも、うねりも変わる海に出合う時、その変わる海にひかれるのかも知れません。

又、海の色的美丽さにひかれます。エメラルド色の海には胸さわぎを感じ、エメラルド色を感じさせない海には海を遠く感じます。同じ海がその色の違いで身近になったり、遠い存在になったりします。

気候風土が育てる人間の地域性を考えますと、山国信州気質はその土地柄からして、ごつごつとして、内にこもり勝ちで、因習にとらわれる所が多いかと思えます。それに反して、変化する海、広大なひろがりを持つ海、とらえどころのない海、その海辺に生きる人々はきつとその海と同じ、ゆったりさを持っているのではないかと想像します。

しかし、動かぬ代名詞の様な山も何万年単位の動きの中では変化しています。私の周りの山も、今を盛りと天空にそびえたつ壮年期の高山あり、丸みをおび、高さもさほどなく老齢期の山あり、山とは言い難い丘陵になり、死滅近い山ありと、動いている山を感じます。

又、長野県では、つい最近野尻湖底の第七次発掘が、小・中学生を含めた三千人という大集団で行なわれました。今は湖底になっているそこで、古代人が生活したであろう、貴重な資料が次々発掘され、動きゆく大地をここからも身近に感じます。

とすれば、山も海も時間の違いだけで、動いている点では変わらないのかも知れませんが……。

日常性を持たぬ海には、とかくロマンを感じ勝ちです。が、水俣のそして神通川のいまわしさを考えると遠い海も恐ろしさを持つて身近になって来ます。

(松本青い鳥幼稚園)

★海外文献紹介★

「霧の中を見通す
—子どもの本の将来—」

by J. R. Townsend

The Horn Book Magazine

June 1977.

英国のように児童文学においても、古くからの伝統を持たなかつた米国は、出版界、図書館界等の組織的活動の努力によって、児童文学を確立させて来たと言われる。一九二四年に発刊が始められた米国の児童文学書評雑誌『Horn Book』もそれらの活動のひとつである。毎号『ホーン・ブック』の表紙を飾る絵(高らかに角笛を吹き鳴らしながら、勢い良く先駆けてゆく馬上の三人の男)が象徴するかのように、子どもの本の進むべき方向を示し、その啓蒙、更に研究に大きい役割を果して来ている。

ここでは、評論家、児童文学作家として、本国英国はもとより、幅広く活躍しているタウンゼンド氏が、『ホーン・ブック』に載せている「霧の中を見通す」という論文を紹介し、児童文学の

将来について考える糸口としたいと思う。

一 子どもの文学の現状

タウンゼンドは、子どもの文学の未来を見通す前に、それが置かれている現在の状況を、今一度確かめる必要があると考える。そして、子どもの文学の現状に関して、それぞれ異なる見解を持つている三つの集団を紹介する。

そのひとつは、作家、出版者、評論家、公共図書館員等の、本に職業的に関係している人々で、彼はこの人達を「本人」(Book people)と呼ぶ。

第二のグループは、両親、先生、学校図書館員等の、子どもに關っている人々を指し、彼等は「子ども人」(child people)と呼ばれる。

本人にとって、本が仕事であるのだから、情況の中心にあるものは本である。子ども人にとっては、中心にあるものは子どもである。子ども人は、子どもの全体的成長に關心を持っており、本はその中のたった一要素に過ぎない。つまり子ども人は、本の文学的長所の評価や、子どもの本の地図の何処にその本が位置するかよりも、むしろ本が子どもにとってどんな影響を与えるかにまづ興味がある。

本人の立場から現状を見ると、「今日程、子どもの為の多くの興味をそそる本が出ていた時はなかった。かつてなかった程、子どもの本の多くの有能な作家や美術家に恵まれ、本の広い選択が可能であり、すべて好調である」と言えるであろう。

これに対して子ども人の立場からは、次のような反対の意見が出るであろう。「大部分の子どもは、本人の述べたような、興味をそそる多くの本を読まない。子どもの多くは、全く楽しんで読書をしていないし、又、しても確なものしか読まず、すべて好調でない」と。同じ状況に関しての、この二つの全く異なる見解は、それぞれの立場において両方正しいとタウンゼンドは述べる。

今日、本人でも子どもでもない第三のグループがある。彼はこれを「目的人」(cause people)と呼ぶ。目的人にとって情況の中心にあるものは、本でも子どもでもなく、ある本が、彼等の持っている目的を前進させるか否かである。即、本は人種、性差別撤廃等の目的達成の為の方法である。そして目的人は、現状が良好であると考えていない。

タウンゼンド自身は、子の親だから、ある点では子ども人であるし、人種、性差別に反対だから、ある点では謙虚な目的人である。しかし結局は、本人であるという立場をとり、現状に対して、かなり好調にいつているという楽観的な見方をし、その根拠

について次のように述べてゆく。

今日、最上の子どもの本は、高い価値があるし、人種、性差別もなく、馬鹿げていないし、難しくもない。又、本を読まない子どもがいるという現状に対しても悲観的になるべきではない。百パーセントの子どもの本が本を読まなくても、そういう子もいていいと認めるべきである。

ただ、どの子どもにも、丁度、すべての子どもが音楽、スポーツ、屋外での遊び、劇等を紹介されると同じように、本を楽しむ機会を与えられるべきである。それでも子どもが本を楽しまないなら、押し付けるのは止めるべきで、彼等に罪悪感を与えることは避けなければならない。

現在、子どもに本を手渡す試みは進歩しつつあり、学校、図書館、家庭でかなりの程度まで達成されている。子どもの本が、今、高い水準にあることが、教師、学生(特に教員養成大学において)、両親、そして職業的に本に関係している大人に、子どもの本が関心を払うに足るものであることを自覚させた。その結果子どもの本のグループがあちこちに生まれ、広がっているという事実は勇気付けられることである。

子どもの為のペーパーバック出版の拡大が、英米において最近著しく貢献している。例えばパフィン・ブック(ペンギンのジュ

ニア版)の年間の売上げを見てみよう。一九六〇年代初には一〇〇万部、一九七三年は六七五万部、一九七五年は出版が後退した年であるにもかかわらず九五〇万部に達している。パフィンの方法が、多く売れると予想される市場向けの本を選ぶのでなく、質の良い本を選択していることは、最上の質の本を作るべきであるというタウンゼンドの信条とも通ずる所である。

二 子どもの文学の未来

現状を踏まえたタウンゼンドは、次に子ども本の未来について展望してゆく。将来を見通そうとする時、私達は、手探りの暗闇—経済的、技術的な霧に包まれている。

何年前から、子どもの為の質の高い本の出版は、浮き沈みはあっても経済的に良い事業だった。しかし、ここ数年、図書館市場も、堅実な支えではないことがわかって来た。本の価格暴騰や、予算据置や削減があると、出版や再版される本の部数は少なくなるだろう。そうしなければ、どの本も売れなくなるから。二、三年前、ある子ども本の本の出版者が、中級の上にいる作家にとって困難な時代が来ると話していた。今やこの困難な時代に入ったのであり、これからも続くと思われる。しかし困難な時代は、今まで多過ぎる程、本目録に載ったまずい本のような、余分

の枝を切り落とすことはするだろう。

近年、英米では出版社の合併、吸収が進んでいる。これは、経済の専門家が本人の間へ、単に利益の拡大という目的のみで割込んで来ることを意味する。こういうビッグ・ビジネスの時代になると、特別の読者を求めたりするような、多く売れない良い本の出版が危険となってくる。この世紀を生き抜く為には、中小の出版社は素早く頭を働かせて、賢く生きてゆかねばならない。

彼は、次に文学的な最近の傾向に触れてゆく。近年、年長の讀者の為の小説や、小さい子どもにとつての絵本は隆盛である。しかし、その中間のグループ(八—十一歳の子ども)は、編集者の努力にもかかわらず、それらの創造的才能の分け前を得ていない。その理由は、前者の為には、作家は自身を自由に表現可能である。しかし、後者(中間のグループ)の為には、絵本ではもう大きくなり過ぎていて、人生や文学的経験、読書能力の限界という壁が作家の自由な表現を妨害している。この現状は今後も続くであろう。そして時々、その薄暗い雲が切れて、晴れることがあるとすれば、それは、善意の編集者の努力の結果ではなくて、予想できない、青天の霹靂のような本が現われることである。

年長の子どもの為のフィクションでは、米国ではいつもリアリスティックなものが主流を占め、英国ではファンタジーが最も関

心を集めている傾向にあり、これは今後も続くと思われ。

最後に、科学技術の問題について。本は、科学技術の進歩による、オーディオ・ビデオやビデオ・カセット等電子工学の時代の到来によって簡単に取って換わられるものではない。本はマス・メディアではなく、生産は比較的安価で、売れ行きが少なくとも持続可能という長所を持っている。子どもの本は、コンパクトで、個人的に親しみ易いので、世の趨勢が、大規模化、非個人化し、マス・プロの方向にある時代の中で、力強く生き残ろうとしている。

タウンゼンドは、こうして地平線の彼方に見えるいくつかの雲について見通して来た後で、子どもの本の将来の不安定さは、人生の他の点でのそれと比べれば小さいものであると述べる。そして次の一〇年間に大きな希望を託し、一九八〇、九〇年代も読書する子どもの絶えることはないと思われ、という明るい予想のもとにこの論文を締括している。

※ ※

折しも、私が本稿に取り掛かっていた二月二十二日、朝日講堂でタウンゼンドの講演会が催された。満員の聴衆の熱気の中で、彼は、"Looking Ahead from 1978"と題して講演した。その内容が、この論文とはほぼ重なるものであったが、今まで社会派的リ

アリズム作品を創作して来た彼が、二、三のファンタジーを手掛けていることが紹介された。このことは、彼によって語られなかった子どもの文学の未来への一方向を示しているのではないかと、大変興味深く思われた。

私はかつてから、彼が声高に叫ぶ論文や作品よりも、彼の意識の表に出て来ないが、しかし彼の作品に執拗なまでに繰返し繰返し顔を出して来る、原風景とも言えるあるイメージに心魅かれていた。それは、ジャングル街のシリーズや『アーノルドの激しい夏』に描かれ大切な役割を果すがンブル原っぱである。又、これは『北風の町の娘』にもハラスエージとして描かれる。隅っこ、凹的空間、洞窟そして母胎へと収斂してゆく、彼の奥深い所に入り、無意識のうちに彼を脅かし続けるこのイメージ。彼の語られない陰の部分ともいべきこのイメージは、ある意味では作品の原動力となっているとも言えよう。このイメージは、彼が今まで試みることのなかったファンタジーという自由な国において、充分に描かれることができたであろうか。ブレイクの詩からモチーフを得て作られたという『夜の森』(一九七四)や、未来を予想して描いたという『ノアの城』(一九七五)等のファンタジーにおいてどのように描かれているのだろうか。翻訳本を手に行ける日が待たれる。

(お茶の水女子大学 清水いく子)

経 験

——悲しい経験・その二——

村 田 修 子

心の重い夏休みが終り二学期が始まりました。私の方が常に意識して、恐る恐るNちゃんにふれる、という感じでした。

気を付けていますと、矢張り前にはみられなかったことがいくつありました。それには、はっとすることがありましたし、涙をさせられることもありました。

当時のメモから二、三をそのまま記してみます。

●二学期が始まった。びちびちとしていた子であったが、おとなしくなりました。その張り、が

感じられない。心なしか私のまわりにいることが多いように思われる。

●九・一八、私が腰掛けているそばで、私とは関係なく椅子に掛け、お人形を両手で持って一人でお人形に話しかけている。(耳を近づけたが内容は聞きとれなかった。前には余り見掛けなかったこの情景は、其の後も何回かあった)

●大変時間がかかったおべんとうをさっさと手早く済ませてしまうようになった。

●連休でおばさんの家へ泊りにいくとき、その仕度を自

分一人でした、と聞かせてくれた。"夜は寒くなると思つて、カーデイガンもちゃんと入れていったよ"

"ゆうべは寒かったから目がさめてしまった"

● "お風呂に入ったときお洗濯するんだ"

ありのままを言っているのだと思うけれど聞く身になると何もかも心が痛くなる。

● 一〇・一三、"大人の(わざとなのか、ママのとは言

わなかった)お化粧つけたらこんなになつたの"とぶつぶつのできた左のほほを指さして見せてくれる。大人感傷で、且つて母親のうつた鏡をのぞき込んでいる姿を想像すると、何ともいえない。

● 一〇・二九、にやにやとえみを浮べて"今日、ママのパンツはいてきちゃった。いちごがついてるんだよ"と見せてくれる。はっ、としたが何気ない様子で"ママはいちごがついたのはいつなの?"と聞き返すと、"そうよ、丁度いいもん、だけどここ(下の方を指さす)が大きいの"これには笑いと同時にどうしようもなく涙がワッと出てきてしまった。Nちゃんはちゃんと分かっているくせに、"どうして笑いながら泣いているの"と私の顔を見ながら、自分もじいんと涙を浮

べている。

● 一〇・二、私にはなく親しいお母さんに、"お母さんがほしいよ、やさしければどんな人でもいいよ"ことばでいったそうだが幼稚園では、又私のところでは本人の口から聞いたことはないし、そういう話にもっていつてみても、すらり、とよけてしまふ、という感じであった。

● 一〇・一七、矢張り遠慮なく言えるお母さんに"二月の私のお誕生日がくるまでに、お母さんがくるといいな、それならお友だちも呼べるしね"といったとか。

● 卒業ま近になつて謝恩会の練習のために母親の出入りが多いのを見て"うちのママ、早く死んじゃって損したな"とぼつんという。

さらっ、とした様子でいるように見えてもいつも考えているらしいことが分かる。

● 一・二〇、遠くから私のことを意識的に、"ママ、ママ、と呼ぶ"そして又離れて見えない方へ行つてしまふ。

● 二・四、私にだきついて顔をくっつけてくる、私もそのまま、ぎゅっと抱きしめてやった。胸から手を入れ

る、「ギャー」というとにこにこして何度もさぐさぐさとして強引にちよつとさわると「さわっちゃった」という。二度位してからは友だちと遊ぶ。

このことは卒業まで四回ほどあった。

友だちとのかかわりでの話は、大変無邪気な男の子が「Nちゃんのお母さん死んだんだろ」といったときに目を赤くしたことがあった。

●一〇・一五、余り絵を書かなかったのに二学期はよく絵を書く姿を見る。はり絵をしている人のそばにいてさっさとやり始める。その周りにいる人もいつもやらない人たちが囲んで一緒にやっつけている。行動を共にすることでいたわって上げることがよく感じられる。

●一〇・一六、リレーをしている組を応援するとき、S子ちゃんが「わたし〇組を応援するわ、だってNちゃんがいるもの、Nちゃんかわいそうなもの」私は「でも自分の応援したい方でいいのよ」といってみる。すると、「でもNちゃんいないところっていうの、だってお母さん、ていうの聞いたら思い出して悲しくなるも

のね

もつともつといろいろなことがあった中で、五歳の子がこういうように考えるものかしら、と考え込まされたことがあります。それは、

●「Hちゃんのママじゃなくてよかったね（お母さんがなくなったこと）だってHちゃんは一人でよその家にとまりにいけないからね。かわいそうなもの」

今でもこの一人っ子同志は仲よし、その家に泊りに行き全く自分の家のように過し、過させてもらう。不幸な中でもそういう暖かさに包まれていることもあって大変思いやりのあるやさしい子に成長し、持ち前の明るさをとり戻している姿に接することは救われた感じがしています。いろいろと教えてもらいました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



ニューヨークの中の日本人（その三）

——子どもの世界——

佐藤 奈美子

P・S・220

P・S・220 QUEENS（クウィーンズ区立第二二〇小学校）が、子ども達の通った学校です。一学年三一四クラス、一クラス二十五―三十五人、それに養護学級と幼稚園四クラスの小さな学校でした。通学していた子ども達は、アメリカ人の他にも、中南米諸国、ヨーロッパ各地、そ

れに中国、インド、韓国、アジアの国々か

らの移民の子弟も多く、日本人は最も多い時には二十名近く在籍していました。校区内には黒人は住んでいませんでしたが、スクールバスで他区から通って来る子ども達がいきました。何をもってアメリカ人と定義するのか分からなくなってしまふのですが、この小さな学校では、いろいろな国の文化を背負った子ども達が仲良く机を並べて、アメリカの教育を受けていたと言えそうで

す。

この学校では三年半の間に、三人がかりで幼稚園から五年生まで、途中でクラスを変った事をも入れると、全部で十のクラスで学んだ事になります。

今でこそ、オープンエデュケーションと言う言葉はさほど耳新らしいものではありませんが、私が初めて出喰したのは、この学校での事です。ここでは、オープンクラスとして、よく話題になりました。そして

それはこの学校でも、まだ新しい試みであつたようでもありません。

見慣れない授業風景に加え、一九七五年

のニューヨーク市財政難の頃には、多数の教職員が解雇になり、授業内容が変わったり、時間短縮になったりと変動も激しく、なかなかその正体がかまみませんでした。

当時、P・S・220には、オープンクラスもあれば、一斉授業のクラスもあるとの事でしたが、三人の学んだクラスは全部オープンクラスと呼ばれるものでした。それで、この学校で見聞した事が、オープンクラスゆえのものだったのか、それとも、アメリカの教育が、そもそもこう言うものだったのか、区別することが出来ません。又、学校によってもオープンクラスの学校、そうでない学校といろいろで、P・S・220がニューヨークの学校を代表すると言う訳には行かないようです。けれどもごく当り前の公立小学校であつた事も事実

なのです。

幼稚園

ニューヨークでは、公立小学校には、キンダーガーデンと呼ばれる幼児部が附属しています。

新学期は九月から始まり、一学年は普通その年の一月一日から十二月三十一日まで間に生まれた子ども達で構成されます。ニューヨーク市では、義務教育年齢は七歳からですが、その年のうちに五歳になる子であれば、キンダーガーデンに入学が許可されます。私達の住んでいた辺りでは、三・四歳になると私立のナーサリースクール、五歳になると公立のキンダーガーデン六歳からは小学校と言うのが最も一般的でした。

学年末の近い五月になると、学校へ登録をし、簡単な面接試験、一日入学、カリキ

ュラム説明会などがあつて、九月、小学校が始まると同時に、キンダーガーデンも始まります。

盛大な卒業式が行なわれるのに反し、アメリカには入学式なるものがあるのかどうか、少なくともP・S・220では一度も経験した事はありません。入園入学の為の特別の準備も無し、それでも、ナーサリースクールの時にくらべれば、まだいくつか準備の物があります。はさみ、のり、クレヨン、それらを入れて置くコーヒーマグの空缶。それにお絵画きの時のスモック。これはお父さんのワイシャツのお古、小学校に上った時にはこの他に、ノート、えんぴつ消しゴム、それに布製のランドセル。ニューヨークの子ども達はとても質素です。キンダーガーデンは、四つのクラスが午前十と午後の二クラスずつに分かれており、バス通学区域にあつた私の所では、いつも午前中のクラスでした。キンダーガーデン

と言っても、小学校と同じ校舎の中にあり、庭も校庭の一隅。ここは小学校の運動場とは金網で柵をされていますが、街の人達も自由に使える公園にもなっています。木蔭にはチェス台もあり、老人や、赤ちゃん連れの若いお母さんがベンチに腰かけて、子ども達の遊ぶのを眺めている光景がよく見られました。

部屋の中は次の九つのコーナーと、真中の広い部分に分かれています。

- ① ままごと遊び、大工仕事をするウエンドイコーナー。
- ② 算数教材のあるマース・コーナー。
- ③ 町の模型、ミニカー等で遊ぶソウシヤルスタディのコーナー。
- ④ 大小様々のブロックのあるブロックスコーナー。
- ⑤ 金魚やハムスター、磁石などの置いてあるサイエンスコーナー。
- ⑥ 流し台、イーゼルのあるアートコーナー

1。

⑦ 絵本やカードが揃っていて、言葉の勉強をするランゲイジアートのコーナー。

⑧ パズルやゲームのあるゲームコーナー。

⑨ 本を見ながら、ヘッドホンでお話を聞くリスニングコーナー。

子ども達は、毎朝学校に着くと、まずその日のプランを決めます。前記の九つの作業の中から三つを選ぶのです。これは直接先生から指導を受ける以外の、いわゆる自由時間のプランです。壁の一隅に、このプランを貼っておくコーナーがあつて、子ども達は一つの作業が終わる度に、うまく出来ると笑い顔、そうでない時には渋い顔を描き込むようになっていきます。

一クラスは二十数名の子ども達と、担任、助手の二人の

Name / I / P / r / a / s / h / i		😊	☹
	Wendy Corner	😊	☹
	Math	😊	☹
	Social Studies	☹	😊
	Blocks	😊	☹
	Science	😊	☹
	Art	😊	☹
	Language Arts	☹	😊
	Games	😊	☹
	Listening Corner	😊	☹

先生。九時から十一時半までを三十分毎に区切り、二人の先生はグループや個人の指導。その間、他の子ども達は、自分のプランに従って、そのコーナーで自由遊び。ちよつとも大声を上げたり、走ったりすると、すごい声で叱られますので、自由に遊んでいるにしては、とても静かです。

前回でもふれましたが、キンダーガーデんでも、言語指導に力が入れられており、先生との学習の時には、ほとんどが文字や言葉の勉強です。すでにワークブックが用意されており、それは段階を追って小学校

の一年二年へと進みます。算数の勉強もこの時から開始され、これも小学校へと続いて行くワークブックの第一冊目が与えられます。英語、算数の勉強に比べると、絵や工作はまだしも、音楽となると全くおそまつで、楽器の演奏など皆無。この傾向は小学校についても同じで、それでも、週一度でも、音楽の先生による音楽の授業のあったこの学校は、まだまだだったかもしれせん。

オープンクラス

始めて小学校の授業参観をした日、教室に入ったとたん、とまどってしまいました。机はあっち向き、こっち向き。立ち歩いている子あれば、教室の隅っこでは床にあぐらをかいて本を読んでいる子もいます。先生は、丸く輪になった五・六人の子ども達の中。そこでは本を読んだり、話し

合ったり、手が上ったり。別のコーナーでは、若い助手の先生が、ひとりの子どもに算数を教えています。時々トイレに立つ子ども、他の先生に呼ばれて教室をぬけ出して行く子、帰って来る子。直接先生が指導に当たっているグループなり、個人なりは、三十分毎に次々に変わりますが、その他の時間を子ども達は自習のような形で学習をしています。三十人程の子ども達が、二人の先生の元ではありますが、それぞれ異なる学習を順序よく進めて行く様子には、びっくりしてしまいました。

P・S・220のオープンクラスでは、机や書棚の配置によって、室内がいくつかのコーナーやグループに分けられています。一応自分の机は決まっていますが、学習内容によって、しょっちゅう他の場所へ移動します。学年が進むにつれ、室内のコーナーの数は減り、図書室、メディアセンター、その他の特別教室へ行く事が多くなっ

て来ます。一クラス全員が揃って行く時間もありませんが、日本とはちがうなと思うのは、個人なり、グループなりで出たり入ったりしている事でした。それで授業中とは言い、流動的な感じがします。

小学校に上っても、子ども達は毎朝自分でその日のプランを立てます。学年、クラスによって形式はいろいろでしたが、低学年の時はその日一日だけのもの、三年生からは、毎朝立てるのはその日の分だけですが、一週間単位で表になっていて、一週間経つと、どの課目がどれだけかどったか分かるようになっていきます。先生が直接指導して下さる学習、特別教室での学習等はあらかじめ曜日と時間が決まっています。残りは自分で学習を進めて行くと言う訳です。

教師側には、それぞれの指導計画がある事と思いますが、意欲ある子はどんどん進

む事が出来る反面、やる気が無ければ遅れてしまう事にもなりかねません。実際、同じクラスの中でも、リーダーや、ワークブックなど、子どもによって進度はまちまちでした。

ふだんカバンに入れて持ち運びしているものと言えば、ノート、えんぴつ、宿題の紙くらい。教科書、教材は学校備え付け。英語や算数のワークブックも、ふだんは学校に置きっ放しで、やり終えてから持ち帰って来ます。家ではわずかの宿題をするだけ。それも土、日はじめ、祝日、夏休みなど休日には出されませんから、子ども達も勉強とは学校でするものと思っていたようです。

教科書と言っても日本とは全く異なり、百科辞典か参考書のように、実際そのようない方がされていきました。

例えば、社会科で、新大陸発見の頃を学ぶ学年では、先生の方から数名の探検家と

研究項目を上げたプリントが配られ、子ども達は自分のやりたい人物を選び、研究項目に従って、教科書や、図書室の本で調べ、レポートを書きます。それを発表し合った後はテストです。共通問題もあります。が、選択問題もあるので、自分の得意とする所を解答すればよい訳です。

英語にも、日本のような教科書が無い代わり、言葉の使い方をリーダーやワークブックで学ぶ一方、一年生の時から読書ノートと言う形で、図書室の本を読みながら、単語や要約の仕方、感想文の書き方を学びます。

三年生になると、それまでのワークブックに代わって、カードによる学習が始まります。算数でも英語でも、先生から新しく習った後は、段階順に問題ののっているカードで問題をこなして行きます。お互いに調べ合ったり、教え合ったりする相手が決まっています。まず友達同志で、それでも分

からなければ先生に教えて頂く、と言う方法がとられていました。

日本ではあまり見かけない科目の一つに、カレントイベントがあります。学校では主として政治問題をスライドで見ながら勉強するのですが、宿題として、新聞記事を切り抜き、それについて要約したり、意見を述べたり、大人の新聞の中から、子どもに分かりやすい記事を選ぶのは大変でした。それでも低学年のうちは、写真の切り抜きに、簡単な説明をつけるだけでしたし、三面記事でも良かったのですが、学年が進むにつれ一面記事、それも学校で学習した事に関係あるものとなって来ると、私もお手上げ。それで近所のお友達と一緒に、彼女のお母さんに助けてもらっていた訳ですが、そのお母さん、私の小さい時にも、窓の開いた新聞にいつもお父さんが困っていた、との事でした。

五年生になった時には、クラスで何部か

ニューヨークタイムスを取り、授業に使っていました。大統領選挙のあった年には、学校中で、フォードかカーターかと選挙をしたそうです。

能力別クラスとスキップ制度

何を基準として、能力が計られているのかよく分かりませんが、P・S・220では、クラス分けは能力別になっているとの事でした。浩史は一年生になって一か月程経ったある日突然、隣りのスマートクラスに入る事になりました。真由美がそれまでのミッドルクラスから、スマートクラスに入ったのは五年生からです。

学期の途中でクラスを変わると言うことは、この学校ではさほどめずらしい事ではありません。真由美も一年生の前半を終えた二月初め、英語で理解出来るようになる、元来の学年である二年生に進級しまし

た。これはスキップと呼ばれる制度で、英語にハンディキャップのある日本人にはよくあるケースでした。こうした特殊な場合を除いても、本当によく出来る子はスキップをして上の学年に進んで行き、反対に、出来なければ落第させられる事もしょっちゅうでした。

真由美が五年生になってスマートクラスに入った時、最初慣れるまで大変でした。算数、英語の内容もむずかしかった上に、スマートクラス特別の科目があつて、理科、社会、図工、音楽など、研究レポートを出す事が多くなったからです。いつも何かテーマをかかえ、本を読んだり、観察したり、作品を作ったりと、レポート作りを追われていた感じです。こうなると、家へ帰つて来ても、遊んでばかりは居られなくなりました。こういう学習は数人のグループ毎に、専門の先生の元でも行なわれ、順番に交替して行つたようです。

特別指導とミーディアセンター

P・S・220には、図書室とはアコーディオンカーテンで仕切られた、ミーディアセンターと呼ばれる広い部屋がありました。ここには、カードを差し込むと絵や文字の現われるテレビのような機械、ヘッドホンでテープを聞く機械などが備え付けられ、専属の先生から、それらの機械を使って指導を受けます。この部屋と設備とは、この学校を特色づけている物の一つだったらしく、父兄にその授業を公開して、説明会が催された事もあります。この部屋には、クラス全員でやつて来て学習する事もあれば、個別に来る事もありました。機械を操作しての学習は、テレビゲームの感ありですし、映画を見ている気分になる物もあります。内容も、言葉の学習だけでなく、算数、理科、社会科など広範囲に渡

り、子ども達はこの部屋へ行ける日が、とても楽しみだったようです。

担任の先生が指導して下さる教室内での授業の他に、このミーディアセンターや、他の特別教室で、専門の先生による特別指導もありました。その中には、日本人の子ども達に英語を教えて下さった、サラ・春山先生の授業もあります。P・S・220には、従来外国人の子ども達に英語指導する専任の先生が居られますが、日本人の多かった一九七三年前後の数年間、日本人の為に春山先生が臨時講師として赴任されました。その様子を一度参観させて頂いた事があります。

ミーディアセンターの一隅にデスクのあった先生の所では、二・三人のグループで、日本人の子ども達が三十分ずつ、絵本やカードで英語の勉強をしていました。

同じ時、他にも何組か学習。

ミーディアセンターの先生と、助手の先

生の元では、黒人の子どもばかり七・八人が、本や機械を使って言語学習。これは、黒人の中には正しい英語の使えない子どもがたくさん居るからとの事でした。

他に二組、一対一での学習。これはお母さんのボランティアで、遅れている子どもの指導との事。スクールマザーと呼ばれ、ランチルームや図書室で手伝っているお母さんの姿もよく見かけられたのは、財政難ゆえなのか、ボランティア精神ゆえなのか。この他にも、「今日は〇〇ちゃんのお父さんが来て、フランス語教えてくれた」とか、「日本人のおばさんが来て、折紙教えてくれた」とか。父兄も直接教育に参加していた、と言う感じでした。また、いわゆる英才教育と言われるものや、希望者なら誰でも参加出来る、課外活動としての、体育、音楽、図工などは放課後に行なわれました。

おわりに

個人を大切にし、個性をのばそうとする教育。自分で考え、得ていった知識。けれども言語指導重視の陰で、憂き目にあっていた理科や体育、音楽など。良きにつけ、悪しきにつけ、この人種のルツボのような学校の中で、自分達も又日本人と言う一族として、学び、帰国していった日本の子ども達。帰国して、日本の公立小学校に通い始めた真由美は、しばらくしてこんな感想をもらいました。

「日本の学校は、みんなが同じ事を習っているし、先生が何でも説明して下さるから楽なんだけど、忙しくて、忙しくて疲れてしまう」と。

好きな物が食べられるけれど、材料集めや料理までしなければならぬのは大変だった。けれども、栄養満点の大ごちそうを、好き嫌い言わず、どんどん食べねばならないのも、しんどい事だと言うのでしよう。

(おわり)

保育の体験と思索

—子どもの世界の探究— (十七)

津 守 真

四歳の二学期、秋も深くなるころ、幼稚園の子どもに接して顕著なことは、子ども同士で遊ぶことに何よりも楽しさを見出し、いるらしい姿である。数人でかたまりになって走りまわり、私の傍をすつと通り過ぎてゆく。また、三、四人肩を組んで便所からもどつてくる。砂を掘りながらも、互いの会話がはずむ。そんなとき、私は子どもに近づくと楽しさをこわすみたいなおそれを感じて、声をかけることもできない。時たま、そういう仲間にいれてもらったときには、その楽しさを維持するのに、とてもエネルギーを使う。こちらが先に立って、楽しさを作り出し、皆がもつと面白くなるようにと考えることもある。

面白く遊ぶこと——先に立ってゆくこと

十月二十五日

朝、庭でNが近寄ってきた。すぐに藤棚の下にいたMくんがかけてこしようと言うので、三人で花壇をまわって走った。それから、はさみおにしようといわれて、私も加わった。滑り台の上にいるとつかまらならしいが、私に限っては、滑り台の上でもつかまると鬼になる。そのうちに遊戯室のわきの木も障地にな

って、それに足がついていればつかまらない。みんな滑り台と木との間を、何度も走って往復する。私もわざと木から離れて走ったり、子どもをつかまえようとしていろいろしゃべりながら走ったり、この人たちと面白く過そうと思って夢中であった。かなりエネルギーを使い、へとへとになった。そのうちにボールをぶつけるとつかまることになる。しばらくしている間に、Sh、S、その他、年長組の子どもが二、三名加わる。

この日、私は、夢中になって鬼ごっこをする子どもたちが、もっと活気が出て意気が上るようにと、いろいろ提案したり、スリルを作り出したり、かなり先に立って遊ぶことが多かった。それでは身も気も使ってかなり疲れたけれども、面白かった。

おとなの方も気をひき立て、子どもたちの先に立って変化をつけ、活気づけてゆくことは、時によって必要であると思う。また、全体としてみると、『育ての心』の中の「小さな太陽」にも記されているように、明るさと励みを与える存在となるように、保育者は、子どもの中にはいるときに自分の気を引き立てること、心をかけるのがよいと私は思っている。私自身の保育の体験の中でも、ことに家庭保育においては、保育が日常事に流れておとな

の感情がそのまま出やすいので、自分自身で気を引き立てることがよい結果をもたらしたことがしばしばあったと思う。子どもから見て、保育者がつまらなそうで、意気消沈していたのでは、子どもはそこで張り切って生きてゆく気を起さないだろう。そういう点で、保育者は、子どもたちが生きる気力をもつことができるように、自分自身に対して客観的になることをつとめるのがよいと思う。もちろん、これには限度のあることであって、とくに長時間子どもと生活を共にする保育者にとっては、それがむづかしくなる時があるのも当然である。

ところが、活気を与えようという気持が先に立ちすぎると、おとなだけが張り切って、子どもの生活とくい違ってしまふ。

十月二十七日

愛育の知恵おくれの幼児のグループで。母親のところにいきたくなったRの手をひいて、私はRが面白くなるように元気づけながら、滑り台をやろうと言って、滑り台の階段をのぼる。傍にいた他の子どもも誘って、賑やかに階段をのぼる。私が先頭に滑る。下の方で手をのばしてトンネルのようにしてくれる子どももいる。何回もくり返して、階段をのぼり滑り台をすべりおろす。そのうちに、さらに二、三の子どもが加わり、数名でつながって

すべる。私としては、面白く皆の気持を引き立てるのに一生けんめいになった感じである。この日は全体に、私はこういう自分自身の感じで動いていたが、この滑り台の場面が最頂点で、あとはばらばらになって、ひとりひとりの子どもがめいめい何かして遊んでいた。そういうときには、賑やかに子どもに近づくとがためらわれ、迷う場面がいくつもあった。

知恵おくれの子どものグループでも、二期期の終りころになると、自然に二、三人が寄り集まることが見られるようになり、おとなが一緒にはいると、数名の子どもが一緒に太鼓橋の上に坐ったり、同じ場所で何かをしていたりする。この滑り台の場面でも、おとなが先に立って、誘ったり面白くしたりしたので、何人もの子どもが一緒にいる面白さを体験することができたと思う。そしてひとしきり賑やかにしたあと、次の瞬間に、それは崩れて、めいめいが自分の遊びをはじめたのを見ると、それには、おとなが先に立って活気を与えたのが役立っていたのだと思う。こうして一緒に遊んでいた子どもたちが散らばって一人ずつになると、だれか一人の子どもの傍に行くことはこちらの勝手なような気がして、面白いことをやっているのに、近寄ってゆくことはた

めらわれてしまう。ひとりひとりが、自分の遊びをして満足しているときには、そこで何が行なわれているのかは分からなくても、その調和をくずさないように片隅に身をおいていればよいのだろうと思う。

十二月一日

知恵おくれの幼児のグループで、近ごろは何人かの子どもと一緒にいられることが多いので、私は先に立って遊び、活気づくようにつとめた。しかし、落着いた遊びができず、何か子どもとくい違う気持が残った。こういうときには、子どもが何をしていたのかも、自分が何をしたのかも記憶に残らない。自分が先に立って活気づくようにつとめただけであって、だれがきてもいいように心を開いた状態ではなかった。こういう日の保育は、保育と言うには価しないものだったという気持が残る。

おとなが先に立ってゆくときには、おとなの考えを進めて、自分が面白くすることが主になることがある。自分が楽しく時を過せるというのは、保育のたいせつな要素であると思うが、そのおとなの世界には、自ら動く子どもの空間がふくまれていなければ

ならないのだと思う。この日には、レールをつなげて汽車を走らせるときにも、私の考えだけで次々に複雑につなげていたのではないかと思う。また、子どもが近寄ってきたとき、私が先に何かをしはじめることが多かった。保育を終って、私は子どもに対して心が開かれていなかったことを強く感じた。そして、次にこの子どもたちとふれるときには、だれがきても私に近づくと (available) ことができるように、自分の心を開いた状態にしておこうと思った。これは先に立つよりも、後からついてゆく心の構えである。

後からついてゆくこと

十二月八日 知恵おくれの幼児のグループで

きょうは、私は玩具も出さず、だれでも近づける (available) な状態に自分の身をおこうと思って保育室に出た。

S がくる。私は床に腰を下して、しばらく無言でゆっくりとSの傍にいる。(Sはレールと汽車が好きだから、いままでだと、私はすぐにレールを出して、どんどんつなげて長くしてゆくのがある) 今日、Sはしばらく私のまわりでうろうろしてから、レールをいれた籠に手をふれ、おろしてくれというように私に身ぶ

りで示す。私が籠を棚からおろすと、レールを二つとり出して私の顔をみるので、私はその二本をつなげると半円形ができる。そうするとSは、さらにレールを二本とり出して、丁度、円になるようにはめる。レールが四本で円形ができる。(今まで、こんなに小さなレールの道を作ったことはめったにない) Sがつなげたレールの部分は、大体はまっているが、完全にははまっていないので、汽車を走らせると、つなぎめでガタンガタンと音を立てて走る。Sは床にねそべり、床に耳をつけてその音をきく。私も同じように耳を床につけてみると、ガタンガタンと規則的に音をたて、本当の汽車が走っているみたいなきこえる。他の子どもがきて、レールが一部分こわれ、私が直すとSもレールをつなぎ直す。Sは更にレールを足して、8字型につくる。私はSが自分でおんな形にレールをつなぐことに驚いた。Sは長い間、私の傍で汽車を動かしていたが、つと立上って庭に出ていった。この日はその後、Sはときどき私のところに来て、にっこり笑って立去る。この日のレール遊びは、いつもほど大じかけでないが、Sにとっては、自分でやったという実感があつたと思う。

この日、私は子どもの後からついてゆく心の構えであった。子

どもより先に手を出さず、子どものやりはじめることを傍で見とどけて助けるようにした。子どもと私との間はゆっくりと動いていた。そして、私は子どもがこんなこともできるのかということを見つけて驚いた。ここに掲げた例だけではなく、他にも同様の発見があり、私は満足して一日を過ぎた。多勢の子どもが私のまわりに集まることはなかったけれども、私の近くにきた子どもは満足しただろうと思う。そして、気がつくと、私が直接ふれないうところで、二、三人集まって何かしている光景が目についた。

子どもの中に動いているものを感じるゆとりがおとなの側にあるときには、その子どもは、その人と共にいることよって成長することのできたときではなからうか。そのときには、おとなも、一段と人間についての理解が増して、成長するときのように思う。単にその場を収さめるために行動したときには、子どももおとなも成長していかないのではないかと思う。

先に立ってゆくことと、後から

ついてゆくことと

人の先に立ってゆくときには、未来に向ってふくらむ豊富なイメージがなければならぬ。それが子どもと関連しているときには、とくに、おとなの予定や段取りだけがあっても、子どもにと

っては自分自身の未来は開けてこない。子どもをひきつけるに足る豊富なイメージがおとなの側に生れるのは、おとなにとって簡単なことではなく、相当長期間にわたって、自分の中で温めていることが必要なこともあるし、また、かなり研究をつんでおくことが必要な場合も多い。

子どもが自分から何かを始めるときには、子ども自身が何かをやろうという気を起しているときであり、子どもの側に、未来に開けたイメージが生れているときである。子どもの生活範囲は限られているから、具体的な活動としては、あたりまえの小さなことに見える場合が多いが、子どもの世界の中では、大きくふくらんだ広い空間を占めている。自分の手でレールをとり出したとき、子どもの耳には、ガタンゴトンと走る汽車の音がすでに聞えていたかもしれない。そのとき、おとながレールを長くしてやる必要はなかったのであって、四本のレールが拙くつなげられた上を走る汽車の音を、床に耳をつけて聞くのでよかったのである。おとなが先に立って面白くするよりも、子どもがすることの後についていて、子どももっているイメージに共感することの方が、子どもにとって満足のゆくことだったに違いない。こうして、子どもの後について、ゆっくりと動いたときに、おとなはこの子どもの世界に一步近づけることができるといえる。そして子ど

もおとなから理解されたと感じ、落着いて自分の道を追求することができた。

フレーベルが、「教育は、必然的に受動的であり追隨的であり」「決して命令的な断定的な干渉的なものであってはならない」というとき、おとなにとっては、子どもの後からついてゆくことの方が基本的な心の構えであることを言っているのであろうと思う。

四歳の二学期に、友だち同士の遊びが面白くなるとき、おとなもまた、子どもと面白く交わることを要求される場合がしばしば起ることを述べた。しかし、いつもそうであるのではなくて、子どもの後からついていって、ゆっくりとつき合うことがその根底になければならないことを述べた。私はこのように考えるのであるけれども、そのいずれにより重点をおくかということは、人によって異なるのであると思う。教育は、ある特定のおとな「その人」と、この特定の子どもの間の交りの中に成立するものである。かならずこうせねばならないというような一般原理に従って行なうものではないと思う。おとなもその生涯のあるときに、子どもの生活に出合って、そこで自分自身の過去・現在・未来にわたる反省的思考の総力をもってこれに応答するのであって、安易にある規準に従って行動してすむことではない。子どもの前に

出るとき、おとなはいつもくり返し、自分自身の「人間」に立ち返ることを要求されるのであると思う。

秋の一日、幼稚園で、私はKともう一人の子どもの後を追って山にいった。Kは、長い間友だちと円滑に遊べなかったが、四歳の秋から、子ども同士で遊ぶことが面白くてたまらなくなった子どもである。Kは山からおりて、園庭のベンチに坐る。私も少し離れたところに腰をおろした。Kは二、三人の男児と何かしきりにしゃべっている。こうして離れてベンチに坐っていると、この子たちが、これからどちらの方に向かって歩いてゆこうと、私が立ち入ることではなくて、この子たちの自由だという感が伝わってくる。秋の陽の中のゆっくりとした時のひとこまである。

そして私はいろいろと考えさせられる。多くのものに縛られたおとなの世界の中で考えるよりも、子どもはもっと自由である。自分自身をどちらの方向に伸ばしてゆかについても、おとなの考えの外に、子どもの自由な可能性がある。おとなはおとなとしての考えを述べるが、それは子どもが自分の道を選んでゆく上の一つの可能性としてあるにすぎない。子どもの中に、自分で抱負をもって何かしようとする心を育てることがたいせつなのだと思う。

(つづく)

ひとりの子どもが私の膝の上に坐り
きて、泣きわめいた。だんだん聞いて
みると、「黄色いしっぽのきつね」と言う。
その子はふさふさしたしっぽの黄色いき
つねのぬいぐるみを好んで手に持ってい
たことを私は思い出した、私はその子と
一緒に歩きまわって、こちらの隅、あち
らの隅、を探す。その子どもも、手を出
して、ひきだしをあげたり、箱をのけた
りして探しはじめた。

どうしてもこれでなければいやだとい
って泣きわめく子どもを前にするとき、
おとなは憤慨したり戸惑ったりする。だ
が考えてみると、おとな自身も同じよう
なことをしているのではないかと思う。
心の中に理想があつて、これにびつたり
と合うものができ上るまでは、満足でき
ず、いろいろに試みたり、やり直したり
する。他人から見れば、その必要はない
と思われても、その人自身にとっては、わ
ずかな色合いの差、肌ざわりの違いなど

が気になるのであつて、心の中に描いた
それではなければならないのである。感覚
の鋭敏さや理想のもち方は、人によって
異なるから一概に言えないけれども、こ
のことは、人の向上心や、未来に対する態
度と関係があると思う。これではなけれ
ばいやだと泣きわめく子どもの心には、実
現したいと思うものが見え始めている。

おとなは、それを子どものために見つ
けてやらなくてもよい。自分の心の像に
合うものを見つけるのは子ども自身であ
る。そのときには遂にそれが見つからな
くて、泣きわめいたまま終つてもよい。
自分の心の理想にゆきあたるのには、時
間と努力とチャンスとを要することを、
子どもは成長の過程で何度も体験してゆ
くのである。

私は別の用事で呼ばれていたが、この
子と一緒に床をはいまわつて探してやつ
てよかつたと思つた。その時にそれは見
つからなかつたけれども。(津守真)

幼児の教育 第七十七卷第七号

七月号 ◎ 定価二二〇円

昭和五十三年六月二十五日 印刷
昭和五十三年七月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

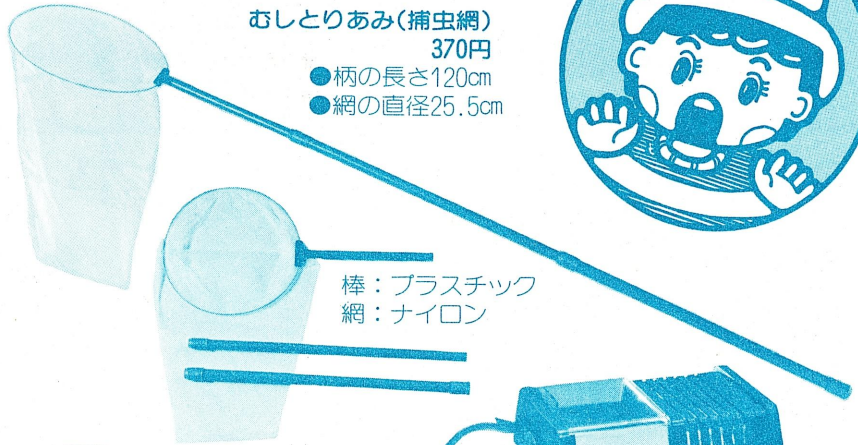
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

夏の用品



子どもたちの夏休みがより楽しく!!



むしとりあみ(捕虫網)

370円

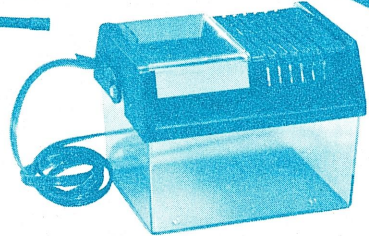
- 柄の長さ120cm
- 網の直径25.5cm

棒：プラスチック
網：ナイロン



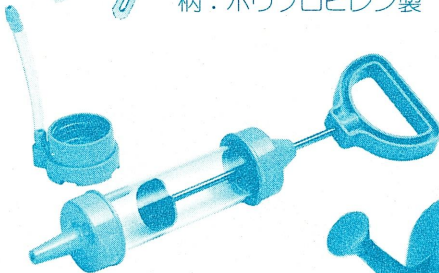
うちわ
80円

柄：ポリプロピレン製



★キダー科学教材シリーズ
かんさつケース(虫ご兼用)
250円

- 透明プラスチックケース…1個
- 肩紐……………1本



★キダー
科学教材シリーズ
(新型)みずでっぼう
250円

- プラスチック本体1個
- 筒先(鉄砲形・ポンプ形)各1個

バケツ 各250円
色：赤 黄 緑 青



砂場用ジョウロ
8個1組 4,000円

- ピンク・グリーン
各4個

プラスチック製

木の優しさとぬくもりを伝える――

和久洋三の白木の玩具



乳幼児用 セット

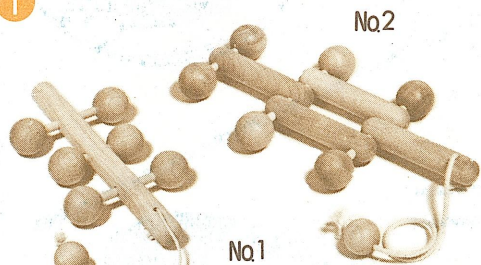
特別頒価20,000円（定価20,800円）

お支払いは、5回分割払い 月々4,000円

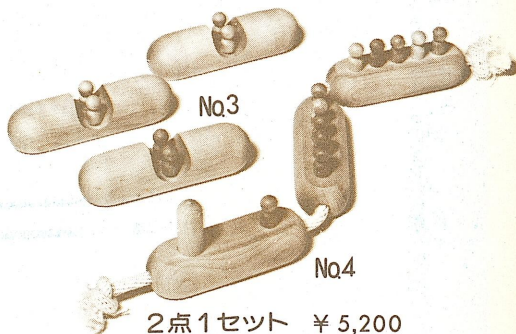
☆ご注文の品は、3回に分けてお届け致します。

第1回	No.1	No.2	No.3	No.4
第2回	No.5	No.6	No.7	No.8
第3回	No.9			

1

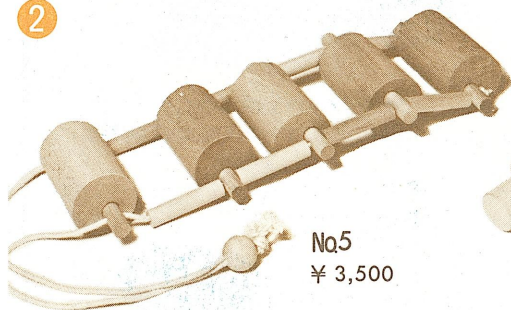


2点1セット ¥ 3,600

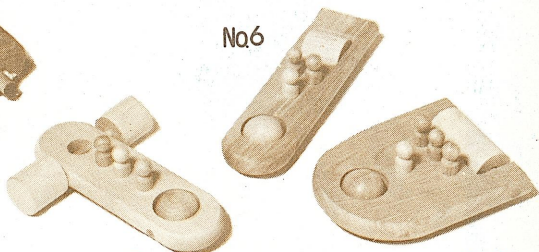


2点1セット ¥ 5,200

2

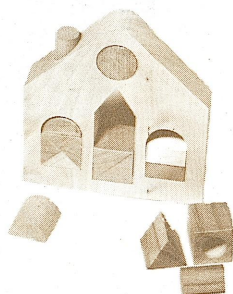


No.5
¥ 3,500



No.7 3点1セット ¥ 5,100 No.8

3



No.9
¥ 3,400



くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 TEL (03) 292-7781代にお問い合わせください。

フレーベル館